コロナ感染拡大の
今こそ求められる
ピア・サポート活動の展開
―報告―

令和３（2021）年３月
日本ピア・サポート学会
研究調査委員会

目　次

はじめに……2

【結果編】

回答者の都道府県……3

回答者の所属……3

1　質問項目１「気になること」……4

2　質問項目２「具体的に起きている課題、問題」……7

3　質問項目３「取り組まれた個別支援」……9

4　質問項目４「成果や課題」……11

【事例編】

◇　小学校の事例①～③　……14

◇　中学校の事例①～⑤　……17

◇　高等学校の事例①～④　……27

◇　特別支援学校①②・支援センター・教育委員会　……32

◇　大学の事例①～④　……37

はじめに

新型コロナウィルス感染は、第３波の拡大期を迎え、終息の見通しが立たない状況が続いています。2020 年は、３月から５月までの学校の一斉休校、６月からの再開と学校における感染予防の取り組みの強化、進路選択（進学、就職）など、教職員にとっても子ども・青年、保護者にとっても、学校、家庭、地域ではこれまでにない負荷がかかっています。

そのような中にあって、多くの子ども・青年たちは健気に頑張っているのではないでしょうか。だからこそ、その一方では、息切れしたり、様々な形で SOS を発信したりしている子ども・青年たちもみられます。**学校教育に関わる私たちには、①子ども・青年たちの学校、家庭などでの様子を丁寧に把握していくこと、②気になる子ども・青年、SOS を発信している子ども・青年への個別の支援を行っていくこと、③学級や学年などで、学校だからできる楽しい取り組み、学習支援、行事活動などを工夫して行っていくこと、④その中で、今だからこそ求められているピア・サポート活動を工夫し展開していくことが求められているのではないでしょうか。**

学校現場における上記のような状況を踏まえて、研究調査委員会として、下記の要領でメールによる緊急調査を行い、全国の取り組み状況を把握するとともに、調査結果をまとめ会員の皆様方に発信することで交流を深め、学校等での実践がより拡がっていくことを目指したいと考えています。

【調査方法】

① 調査方法：メールにて依頼し返信を求める。ＨＰにも掲載し依頼する。
（別紙 Google フォームによる調査用紙参照）

② 調査対象：アドレスを登録している会員には直送。学会ＨＰで全会員に依頼。

③ 調査期間：2021 年１月１日（金）～2021 年１月 31 日（日）

④ 結果報告：子ども・青年の状況と取組などについて、校種別に Web 冊子(事例集)にまとめ、３月 31 日までに学会ＨＰにアップし、学会員で共有していく。

【アンケート内容】

・所属（校種など）　・都道府県名　・氏名　・メールアドレス

1．コロナ感染拡大のもとで、子ども・青年の生活、様子について気になることを記入してください。
2．学校、学級などで、具体的に起きている課題、問題などについて記入してください。
3．1、２を踏まえて、取り組まれた個別支援について、内容を記入してください。
4．その取組の成果や課題などについて記入してください。
5．１、２を踏まえて、学校、学級などで取り組まれたこと、工夫されたことについて内容を記入してください。
6．その取組の成果、課題などについて記入してください。
7．現在の子ども・青年の状況を踏まえて、今後の取組課題、大切にしたいことなどについて記入してください。

令和３（2021）年３月
日本ピア・サポート学会　研究調査委員会

―結果編―

◇　回答者の都道府県

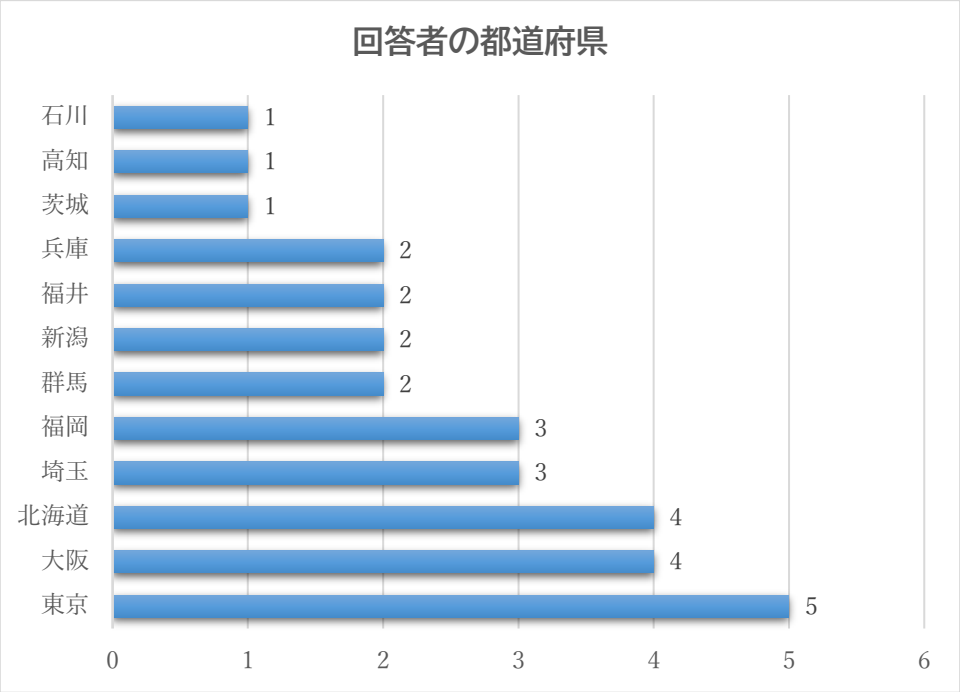


図１　回答者の都道府県

全国から３０件の回答が寄せられました。

◇　回答者の所属

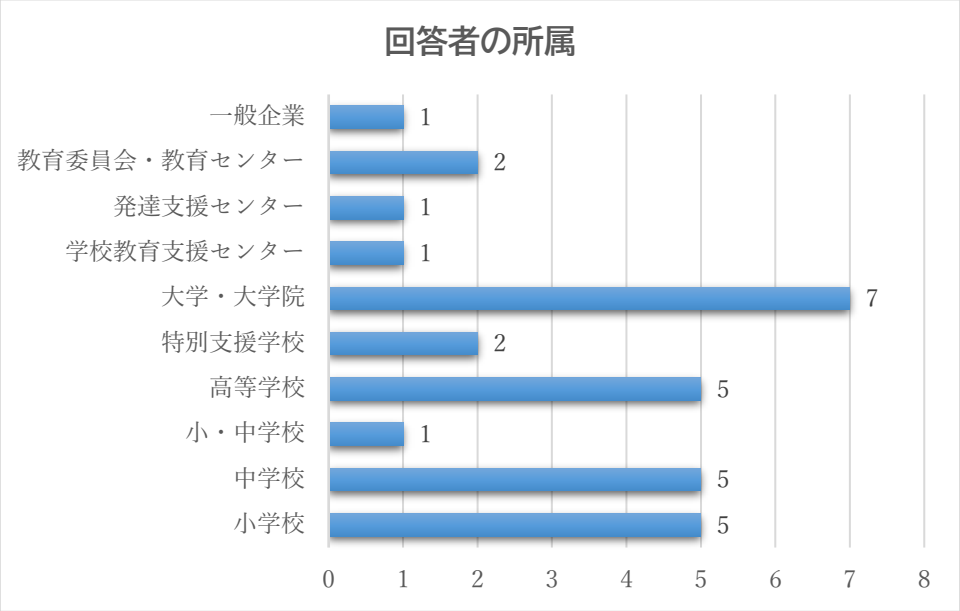


図２　回答者の所属

小学校、中学校だけでなく、さまざまな所属の方からの回答がありました。中でも、大学・大学院に所属しておられる方からの回答が最も多かったです。

1　質問項目１「気になること」

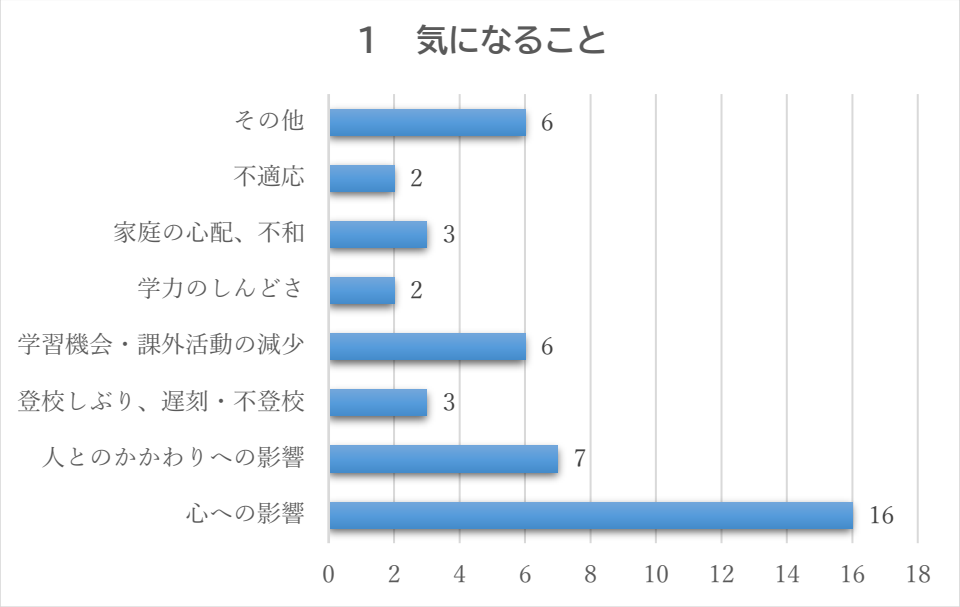


図３　「気になること」

記述していただいた内容を、キーワードごとに整理してみました。

「心への影響」を懸念する回答が最も多く、全回答の半数を占めました。次いで、「人とのかかわりへの影響」「学習機会・課題活動の減少」を懸念する回答が多く寄せられました。

以下に、「心への影響」に分類した回答をお示しします。

心への影響

自分の不安感を表現しない。

感染拡大によって、休校、分散登校を経験しました。なんらかの不安を抱えている生徒がいました。意活発な子どもが、ネガティヴな気持ちになっていたことが、教育相談から伺えました。

オンライン授業による疲弊、課題の多さに諦めとドロップアウト、一方で課題型に慣れてしまい時間割を嫌う学生、課題を完璧にこなすあまりにパソコンを見るだけで吐き気がしてくる、抜毛などの症状が現れる学生もいる。

不安や恐怖が強くなっている

私は中学１年生の学年主任を担当しています。５月いっぱいが休校（週に１～２回，１回１時間程度の登校日あり）で，６月から授業再開となりました。
登校日の時は，全員が登校していましたが（学年 55 名），２校の小学校から入学してくる学校で，互いに気を使い会話もなく緊張している様子でした。

学校行事等の教育活動では、今までより制限されたものになるので、子どもたちが、今まで（例年）のような充実感、達成感を味わいにくくなっています。

保護者が医療従事者で、一時期ピリピリしていたこともあった。生徒の身近に PCR 検査を受けた人がいたり風邪症状があったりして、やむを得ず欠席しないといけない時があり、そのようなときは教職員も家族も不安が高かった

経済的であったり、見通しが持てなかったり等、大人の不安に影響を受け、不安を抱いている子どもが見られる。

非日常が日常になり従来の生活様式が持続できず様々なストレスが発生していること

学習課題の要求の多さから、ストレスが見られる。

昨年、特に夏休み明けから子ども達の不安感や喪失感の増大が感じられる。
学習の遅れや格差があり、さらに心身症状があらわれている子ども達が多い。

コロナ渦で、学校行事や進路に関する活動がなくなってしまい、学校生活への不安を抱えている

休校明けは、子ども達がすごく緊張している様子がみられた。子ども達に元気がなく、学級での活動も機能するまで時間がかかった。3 ヶ月間学校に登校しなかったことで、今までできていたことができなくなっている様子も見られた。「楽しみたい」という気持ちがあるものの、緊張している子、今まで通りの子、今まで以上に頑張れる子の３パターンに分かれた。しかし、学校再開後は、授業やいろいろな活動に参加する中で自信ももてるようになり、現在ではどの子も自分を出せるようになった。エネルギーもたまってきていることを感じている。

①学校生活におけるほとんど全ての行事が中止となっていることや、外出の制限、コンサート等各種イベントの中止により、ストレスの発散ができていない印象がある
③例年より摂食障害を発症するケースが増えている

生活のリズムの変化による心理的、身体的疲労。先の見通しが持ちにくく閉塞感が漂い始めている。

登校不安による欠席が目立つ

回答を見ると、特に「不安」を挙げた回答が多くなっています。他にも、子どもたちが「緊張」「ストレス」「疲労」を感じているとの回答が多く見られます。また、摂食障害など心身症状がみられるとの回答もありました。

その他、回答者が懸念していることを、キーワードごとにまとめて示しました。

表１　「気になること」回答一覧

人との関わりへの影響	仲間と関わりをもてない、持とうとしない生徒が多い。
	学習機会の制限。課外活動の制限。通常の交友関係をもてないこと。
	ネットを介さずに対面で人に会ったり接したりする機会が極端に減っていることの弊害（豊かな実体験の機会が減り、思考や視野が狭くなり、他者理解や自己理解の力を磨く機会が失われている等）が気になります。
	臨時休校が多く、生徒たちの人間関係がやや薄く、逆説的だが、対人関係によるトラブルが例年に比べ少ないと感じている。
	大阪市西成区の学校で，厳しい家庭環境で保護者のサポートも得にくい状況とコロナ の影響で，上手く仲間関係を結べず，学習面では，「遅れを取り戻すためにがんばろう」とどの先生からも言われ，もともと学力的にもしんどい子ども達は，学校に行く理由を見失っていたのではないかと思います。
	・ソーシャルディスタンスをするあまり、子ども達同士の関わり・繋がりが希薄になっているように感じる。 ・ステイホームの時間が増えているため、人と関わる機会、タイミングが少なくなっているのではないかと感じる。
	②マスク生活で素顔が分からないせいか、友人関係の距離感が分からなくなっていたり、SNS等への依存が強くなっている印象がある
遅刻・不登校	私は中学1年生の学年主任を担当しています。5月いっぱいが休校（週に１～２回，1回１時間程度の登校日あり）で，6月から授業再開となりました。 登校日の時は，全員が登校していましたが（学年55名），２校の小学校から入学してくる学校で，互いに気を使い会話もなく緊張している様子でした。 その後授業が再開し通常の学校生活が始まると，徐々に遅刻や欠席が増え始めました。大阪市西成区の学校で，厳しい家庭環境で保護者のサポートも得にくい状況とコロナ の影響で，上手く仲間関係を結べず，学習面では，「遅れを取り戻すためにがんばろう」とどの先生からも言われ，もともと学力的にもしんどい子ども達は，学校に行く理由を見失っていたのではないかと思います。 現在は，毎朝10名ほどがいない状態でスタートします。電話連絡，家庭訪問などの働きかけで，遅れて登校してきますが，欠席は大体毎日入れ替わりで5名ほどいます。全く登校しない生徒はおらず，別室やSCとの面談など，何らかの形で出席はしています。それでも，２学期終了時点で，欠席日数が多く「不登校」にカウントされた生徒が17名でした。（再掲）
	コロナ休校以来不登校になった生徒がいる
	登校不安による欠席が目立つ（再掲）
学習機会・課外活動の減少	学校によっては、秋まで直接の会話を控えさせるところもあったそうです。
	学習機会の制限。課外活動の制限。
	学校行事等の教育活動では、今までより制限されたものになるので、子どもたちが、今まで（例年）のような充実感、達成感を味わいにくくなっています。（再掲）
	集団で過ごす機会が減少したこと
	・コロナ渦で、学校行事や進路に関する活動がなくなってしまい、学校生活への不安を抱えていると感じる。（再掲）
	①学校生活におけるほとんど全ての行事が中止となっていることや、外出の制限、コンサート等各種イベントの中止により、ストレスの発散ができていない印象がある（再掲）
学力のしんどさ、格差	その後授業が再開し通常の学校生活が始まると，徐々に遅刻や欠席が増え始めました。大阪市西成区の学校で，厳しい家庭環境で保護者のサポートも得にくい状況とコロナ の影響で，上手く仲間関係を結べず，学習面では，「遅れを取り戻すためにがんばろう」とどの先生からも言われ，もともと学力的にもしんどい子ども達は，学校に行く理由を見失っていたのではないかと思います。（再掲）
	学習の遅れや格差があり、さらに心身症状があらわれている子ども達が多い。
家庭の心配、不和	特に自営業（飲食店）の家の生徒について影響があると感じた。家庭を心配したり、手伝いをしたりと以前より家庭に目を向けている様子がうかがえた。また、保護者が医療従事者で、一時期ピリピリしていたこともあった。生徒の身近にPCR検査を受けた人がいたり風邪症状があったりして、やむを得ず欠席しないといけない時があり、そのようなときは教職員も家族も不安が高かった。（再掲） 　日頃は手洗いやうがい、消毒はまめにしていたものの、ソーシャルディスタンスは校内ではあまり守らせることができなかった。受験や学校行事が無事に行われるように、という祈るような気持ちは生徒達から日々伝わってくるし、それらが無事行われるように尽力している先生や家族に感謝する気持ちも伝わってくる。 　そのようなことから、どちらかというと、コロナのお陰で気づけたこと、つながれたこと、工夫できたことというプラスの影響が大きいのではないかと感じている。
	親の収入が減って生活に困窮している家庭がある。
	⑤家族関係の不和が増えている/元々不和だった家庭ではさらに悪化している
不適応	上手に適応している子が多いが、適応できていない生徒もいます。
	④子ども達が抱えている問題が、例年よりも強く表出されている印象がある
その他	ASDの当事者にはかえって都合が良いらしい。
	子どもの教育的ニーズへの対応が，担当する学級担任のアセスメントの力量・集団作りの方針などによって，異なるようです。
	特になし
	大学生の悩みの実相が掴みにくい点
	塾、児童館、子ども食堂の閉鎖などで居場所を失っている。
	常にマスクを付けてのかかわりなので、表情から察することができない子が増えるのではないか。

「心の影響」に次いで、「人とのかかわりへの影響」が多く見られました。その中で、人間関係がやや薄く、友人・仲間関係が結びにくくなっていると感じている回答者が多いことがわかります。また、遅刻や不登校が増えたと感じている回答や、学習機会や課外活動が減少したことにより、学力の遅れだけでなく、達成感や集団で触れ合う良さを味わう機会が減少したことを懸念する回答も見られました。さらに、適応ができていないと感じたり表情などに感情があらわれないことを懸念したりする回答も見られました。他にも、家族の心配や不和なども感じている回答が見られました。

2　質問項目２「具体的に起きている課題、問題」

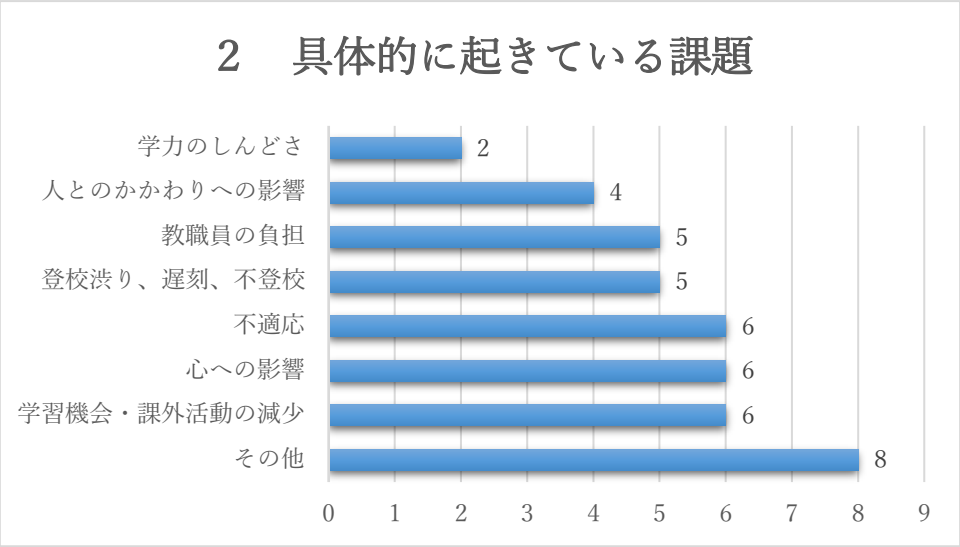


図４「具体的に起きている課題、問題」

具体的に起きている課題として、やはり「心」への影響が多くなっています。次いで、「学習機会・課外活動の減少による課題」「不適応」が多く見られることがわかります。また、「教職員の負担」を感じている回答も少なくありませんでした。

以下に、キーワードごとに回答をまとめて示しました。

表２　「具体的に起きている課題、問題」回答一覧

学習機会・課外活動の減少	修学旅行が予定通りいかなかった。 感染拡大防止のため、授業参観等できなかった。 行事など、制約が多々あった。
	集団活動の場が減っている
	コロナ禍の中で全校生一斉に集まることができないので、もともと行ってきた学校の取組（伝統）等が次の学年へ伝わりにくい現状があります。上の学年を見て育ってきたことが、出来にくくなっています。
	対面でのコミュニケーションをとる機会が減少したこと
	遠隔授業（Zoom）を取り入れ、遠隔授業と対面授業を組み合わせて教育活動を行っています。多くの生徒が遠隔授業に慣れ、上手に学ぶことができています。事前にWi-Fiなどのネット環境をチェックするとすべての生徒がネット環境は整っていました。（通信制の高校なので、もともとネットを使っていたので）。　プラス面は授業の出席率がUPしました（好きな授業を選択して受講するスタイル）。遠くから通っている生徒もいるのでZoomだと出やすいようです。 デメリットは、Zoomで画面を見続けると頭痛がする生徒も数名でました。課外活動に多くの制限が出て、修学旅行など、いくつかの活動が中止になりました。屋外の活動、飲食を伴わないものは積極的に実施しています。体育祭などもできました。文化祭はZoomを使って実施するなどいろいろと工夫して対応しています。
	学校行事が軒並み中止になり、残念に思う生徒がいる一方で、行事が苦手な生徒の情緒的な安定に繋がるという事も生じている。
心への影響	授業でオンライン上だけなので被害的になる学生、コロナの感染が怖くて一歩も家から出られなくなっている学生などもいる。
	感情のコントロールが苦手な子が多い（すぐに手が出る）。 我慢ができない子が多い。
	新しい生活様式への戸惑い。先が見えない閉塞感。
	今までなかった行動（気勢）が見られた。個人批判が多くなった。
	Zoomで画面を見続けると頭痛がする生徒も数名でました。
	部活動の休止による喪失感
不適応	集団生活への不適応
	教室に入れない児童や周囲の目が気になる子が増えている
	特別支援学級在籍生徒が55名中8名おり，それ以外にも発達や愛着の課題が疑われる生徒が多数います。彼らは，仲間関係を結ぶ取り組みを丁寧に進める必要があります。しかし，今年度はコロナの感染対策で，こうした機会を飛ばして学校生活が始まりました。そのため，もともと課題の大きな子ども達は，以下のような課題，問題を抱えることになってしまったと考えています。 ・教室に入れない ・別室に来ても寝てばかりいる（再掲）
	教職員の多忙により、きめ細やかな対応ができず、子どもたちが荒れ始めている
	今までなかった行動（気勢）が見られた。
	予定の急な変更に対応ができない生徒がいる。特に特性的に急な変更がかなりの負担になる生徒もいる。また接触を嫌いマスクが出来ない生徒もおり、ソーシャルディスタンスが取れず指導に苦慮する場合がある。 学校行事が軒並み中止になり、残念に思う生徒がいる一方で、行事が苦手な生徒の情緒的な安定に繋がるという事も生じている。

登校渋り、遅刻・不登校	登校渋り
	特別支援学級在籍生徒が55名中8名おり，それ以外にも発達や愛着の課題が疑われる生徒が多数います。彼らは，仲間関係を結ぶ取り組みを丁寧に進める必要があります。しかし，今年度はコロナの感染対策で，こうした機会を飛ばして学校生活が始まりました。そのため，もともと課題の大きな子ども達は，以下のような課題，問題を抱えることになってしまったと考えています。 ・登校しぶり ・遅刻，欠席 ・不登校
	元々中学校では不登校傾向の生徒が、今年度の休校期間が長く、高校生活リズムを作る前にリズムに乗りきれず、不登校に戻ってしまったことがあった。
	部活動の休止による喪失感や、体調の悪さで遅刻や欠席が多い
	コロナ不安による欠席は、出席停止扱いになるため、安易に欠席する生徒も多い。陽性者が体調回復後、学校に来れなくなった事例がある。
教職員の負担	今回のコロナ禍というこれまでにある程度の経験値の蓄積がない事態への対応に、教職員も保護者も社会も戸惑いながら当たっている状況を子どもたちが日々見ている中で、それらが子どもたちの学校観・教師観・親観・社会観等の形成に及ぼす影響についても、今後も継続して注視していく必要があると考えます。 オンライン授業の準備を始めコロナ禍で必要が生じた様々な課題への対応に追われて、教職員に時間的・精神的・体力的な余裕がなくなっていることからの影響が特に気になるのは、もちろんですが。
	また、学校行事のやり方や内容一つ一つを検討し、これまでとは違う形にしていかなければいけないことに、担当者の負担がかなり大きい。しかし、勤務校では（ポジティブ教育に取り組んでいることもあり、）逆境にかえって燃えている。
	教職員の多忙により、きめ細やかな対応ができず、子どもたちが荒れ始めている
	教室に入れない子どもたちの校内での対応に限界がある。
	・活動が制限される中で、どのような学習活動をおこなっていくのか。 ・どこまでどの活動を行えるのか、行って良いのかなどの線引き。
人との関わりへの影響	身近にコロナの感染者がいる場合は、人への懐疑的な対応。
	友達ができずに大学に馴染めない学生、対面の機会がないので顔を合わないなかで支え合う文化がつくりにくい（私の感じていること）
	特別支援学級在籍生徒が55名中8名おり，それ以外にも発達や愛着の課題が疑われる生徒が多数います。彼らは，仲間関係を結ぶ取り組みを丁寧に進める必要があります。しかし，今年度はコロナの感染対策で，こうした機会を飛ばして学校生活が始まりました。そのため，もともと課題の大きな子ども達は，以下のような課題，問題を抱えることになってしまったと考えています。 ・ケンカすらしない（ケンカするほど仲良くなっていない）（再掲）
	大学に通学できないためにキャンパスライフ（修学、課外活動、学友らとの交友など）の充実が困難になっている。
学習のつまづき	特別支援学級在籍生徒が55名中8名おり，それ以外にも発達や愛着の課題が疑われる生徒が多数います。彼らは，仲間関係を結ぶ取り組みを丁寧に進める必要があります。しかし，今年度はコロナの感染対策で，こうした機会を飛ばして学校生活が始まりました。そのため，もともと課題の大きな子ども達は，以下のような課題，問題を抱えることになってしまったと考えています。 ・学習のつまづき（再掲）
	発熱があるとすぐ出席停止にされ、授業の理解がついていけない生徒が増えた。
その他	子どもの学校生活における対人的な課題や学習・キャリアにかかわる困難に，気づかれない，または，さりげなく声をかけたりされない状況が一部にみられる
	学校公開や授業参観などがほとんど実施できていないため、児童の実態が保護者に伝わりにくい。また、保護者同士のかかわる場が作れない。
	大学に通学できないためにキャンパスライフ（修学、課外活動、学友らとの交友など）の充実が困難になっている。オンライン授業そのもののプラス面とマイナス面。新しい生活様式への戸惑い。先が見えない閉塞感。
	昨年とさほど変わらない。保健室に通う子もいるが、保健室に通う回数はだんだん減ってきており、昨年と同じような感じ。登校を渋っていた子もいたが、体育大会などの活動を通して先生方のサポートもあって渋ることがなくなった。
	zoomなどのミーティングが増えたがどこか物足りない
	同上。転退学はむしろ減っている。
	学校現場ではないため具体的には把握できていません。
	学校に所属していませんので、回答なし

先が見えない閉塞感からか、一歩も外に出られない、被害的になる、個人批判をする、感情のコントロールができずにすぐ手が出てしまう、などの姿が子どもたちに見られるようになったとの回答が寄せられました。また、これらにより、登校渋りや遅刻・不登校が増えたとの回答も少なくありません。さらに、登校していても、人への懐疑的な対応や友だちができない、学校になじめないという姿にも表れているようです。他にも、学習機会や課外活動の機会の減少による学習のつまずきも見られています。

一方で、「教職員の負担」という課題が新たに浮かび上がってきました。これにより、「対応が十分できない」「学級が荒れている」などの回答も見られました。

＜質問項目１．２の考察＞

質問１，２から、子どもたちは「不安」「ストレス」「緊張」「喪失感」「閉塞感」などを感じていることがわかりました。このことは、国立成育医療研究センターが令和２年９月から 10 月にかけて、全国の小学１年生から高校３年生 2,111 人を対象にオンラインで実施した「コロナ×こどもアンケート第３回調査」と同様の傾向となっています。同調査によると、子どもの 42%が「コロナのことを考えると嫌な気持ちになる」を選択しています。また、「すぐにイライラする」は 30%、「最近集中できない」は 26%でした。また、いずれか１つ以上のストレス反応を選択した子どもは、回答全体で 73%でした。これらのことからも、新型コロナウィルス感染症の影響により、多くの子どもたちが不安やストレスを感じていることが示されています。また今回の調査では、心身症状に現れるなど、特に専門的な支援が

必要な子どもたちの姿も心配されました。

さらに本調査では、登校渋りや遅刻・不登校が増えたとの回答が見られましたが、前述の第３回調査でも、学校に行きたくないことがあったとの回答の割合は、「ときどき」が 19%、「いつも」「たいてい」が合わせて 11%であったと報告されています。コロナ禍特有の課題として、新型コロナウィルスに罹患した子どもが回復後に登校できなくなった事例も報告されました。

大学では通学することができないため授業や課外活動、交友関係といった通常のキャンパスライフを享受できず、友人との対面も叶わないため大学に馴染めない学生がでています。こういったことから、支え合う文化がつくりにくいといった回答もありました。

以上のようなことから、小学生から大学生まで課題はそれぞれではありますが、心への深刻な影響が出ているといったことは共通しており、周囲の大人はその事実を受け止め、適切な対応をしていく必要があります。

３　質問項目３「取り組まれた個別支援」

上記１．２の回答から見られたような気になる子どもたちに対して、次に示すような個別の対応がとられました。

表３　「取り組まれた個別支援」の回答一覧

電話、面談、家庭訪問、教育相談	面談の実施
	教育相談や学校生活アンケートを丁寧に実施した。 可能な感染予防策をとりながら、できる限りの教育活動を実施した。
	アドバイザー担当としては話を聞き、コンタクトをとり、オンライン上の課題や悩んでいることをなるべく解決するように努めた。学生相談や障害学生支援室に繋がっている学生は定期的なオンラインカウンセリングが、修学支援をうける。
	個別支援としては特にありません。（担任による定期的な教育相談等は以前より行っています。その他、ストレスチェック等）
	フルタイムの専任としての勤務は７年くらい前に退職しましたが、退職後も様々な年代の教え子たちや知人を介しての方から、そのお子さんや教え子やその保護者の件を始めいろいろな相談が電話やメールで寄せられるという状況はコロナ以前と変わりません。第一波以降はコロナ禍での逼塞感を口にしない人は皆無で、共感を伝えつつ、平凡な日常の有難さへの気づきも共有しております。 退職後は特に、年齢にかかわらず《対等の立場で傾聴し、ともに考える》ことをさらに心掛け、フルタイム勤務時代と同様に完全ボランティア（謝礼は固辞）ですが、一人ひとりへの精一杯の誠実な対応をと努力しております。教えられることも多い日々で あることに感謝しております。
	休校中は担任と部活動の顧問が全員の生徒にそれぞれ電話をしたり、ホームページやメールなどでまめに連絡事項を伝えたりした。Q-Uや「ちょっと聞かせてアンケート」も学期ごとに３回行った上で、個人面談をたびたび実施したりして生徒の状況把握に努めた。 気がかりな生徒については、保護者面談や家庭訪問、ケース会議を定期的に行っている。対人恐怖で登校できない生徒については、適応指導教室において、ついたて越しにSSWをはさんでの面談をするなど個に応じた関わりをしている。
	子どもたち同士をかかわらせることも難しいため、一人一人と話をする時間を少しずつ設けた
	電話で学生の様子を確認した
	新型コロナ感染対策をした上での個別相談、電話相談、メール対応など。
	家庭訪問と、定期的な電話連絡をした。
	・休校中には、ＺｏｏｍやＴｅａｍｓを活用したクラス会や個別面談を実施しつながりをつくる活動をした。
	電話連絡や面談を行ったり、必要に応じてSCなどと連携して対応したりしている。
	家庭訪問を実施したり、校内で別室での個別対応に取り組んだ。
学年、学校全体での共有	気がかりな生徒については、学年会で報告し、学年の全教員で共有し、担任の関わりだけで不十分なときは、学年主任、進路主任、生活担当、相談担当などが状況に合わせて関わるようにした。
SC,SSW等どの連携	SC、SSW等との連携
	担任や保健室との連携を密に取り、なるべく相談室につながるよう工夫した。
	電話連絡や面談を行ったり、必要に応じてSCなどと連携して対応したりしている。
アンケート調査	文章でのアンケート調査
	教育相談や学校生活アンケートを丁寧に実施した。 可能な感染予防策をとりながら、できる限りの教育活動を実施した。
	現状の自分理解ができる簡易検査を集団で実施し話し合う場を設けたり、情報提供を通信で毎月行った
	分析のための講習会を全教職員で受けた上で、SASA（福井県独自の学力調査）の質問紙調査（生活や学習に関する質問紙）も前期と後期の２回行ったり、Q-Uや「ちょっと聞かせてアンケート」も学期ごとに３回行った上で、個人面談をたびたび実施したりして生徒の状況把握に努めた。 また、生徒達に自己PRとして「長所、短所、趣味、特技、家での役割」それぞれの生活に合わせたものを作成して書かせた。
	個別支援としては特にありません。（担任による定期的な教育相談等は以前より行っています。その他、ストレスチェック等）
	教育相談コーディネーターがリードし，実態把握やスクリーニング用のシートを提案した

仲間からのサポート	仲間からのサポート活動
	現状の自分理解ができる簡易検査を集団で実施し話し合う場を設けたり、情報提供を通信で毎月行った
	学校祭もこれまでとはやり方を変え、準備期間も短かったが、それでも「一人一役」を大事に、全ての生徒にやりがいと達成感を味わわせたいと思ってそれぞれの教員が生徒たちに関わるようにした。回答者は装飾担当で初めての役割だったが、装飾係を希望して集まってきた６０人すべての生徒に必ず達成感を味わわせたいと思い、何度もいろいろな形で話し合いをさせて、役割の内容や方向性を固めていった。学校祭後、生徒達も「装飾係をやってよかった！」と言っていたが、回答者自身がやりがいを感じさせてもらえたと思っている。
	年間を通してのピア・サポート学習の実施
	フィジカルディスタンスを保った、ピアサポートの実践。
担任への助言	月一回の訪問ですので、担任への助言。
学習支援	個別に補習対応
グループアプローチ	グループアプローチの提案。
その他	zoomと実際に会う機会を持つ
	情報提供を通信で毎月行った
	学校祭だけでなく、生徒達に何かにつけて役割を与え、存在感や有用感をもたせたことで様々な場面で様々な生徒が輝くことができたように思う。そのことが、それぞれの生徒への個別支援にもなっていたのではないかと思う。生徒達は、制限された生活の中に今まで気づかなかった充実感を発見していたことが振り返りなどからうかがえた。
	プラス面の行動を多くすることに意識を向けさせた。
	Zoomで頭が痛くなる生徒は、登校させて、Zoomの授業をライブで受ける対応をしました。遠隔授業の為、新入生が仲良くなるチャンスが減り、登校が難しくなる生徒も数人出ています。
	夏休み等の長期休みを使用して、学校ではできなかった活動に取り組み、ＩＣＴを活用してまとめたり、友達同士で見合えるような環境を作った。
	授業中の個に応じた声かけをすごく意識した。課題をしているときや困っている時に個別にポジティブな声かけを多くするよう心掛けた。そのうちに子どもが「先生、～できたよ」と自分から言えるようになった。
	ホワイトボードやICT機器を使い、個別に予定変更について確認した。またマスクを一秒単位でつける練習を行った。
	コロナ不安については保護者の意向もあるため、無理に登校させることは難しい。陽性者が回復後教室に行きづらい状況にあったため、別室登校を促した。

寄せられた回答のうち、電話、面談、家庭訪問、教育相談が多く実施されています。また、面談などを行う際に、状況把握を行う必要性から、アンケート調査を実施しているとの回答も複数寄せられました。さらに支援の必要な児童生徒には、学校の教職員だけでなく、SC や SSW などの専門家との連携や、子ども同士のサポートを実施したとの回答も複数寄せられています。

＜質問項目３の考察＞

質問項目１，２からわかるように、新型コロナウィルスは、子どもの心を含む日常生活に大きな影響を与えています。そのような中だからこそ、何に不安や恐怖を感じているのか、何にイライラしたり閉塞感を感じたりしているのかなど、子どもたちの声をしっかりと聞くことを大切にした取り組みが必要です。今回の調査でも、個別の面談や家庭訪問、別室登校など、対面で話ができるようにすることを第一の目標にして、一人一人の状況に応じた形態で実施を模索しています。対面が難しい場合でも zoom などを活用して、子どもたちが意見を表せるように、また、それを取り入れられるように努めています。

前述の国立成育医療研究センターの調査では、考えや気持ちを話したり、話したことを取り入れてもらったりするにはどうしたらいいと思うか、という質問に対して、「他の生徒に聞かれないところで、安心して話せる部屋で話を聞いてもらう」「先生も生徒の気持ちになる」「カウンセラーがいるとうれしい」「アンケートを実施して、気持ちに寄り添った内容で聞いてほしい」「一方的ではなく、お互いが意見を言う立場を設ける。学校側じゃどうして行事などが実施できないのか明確に理由を話す。生徒にも意見を述べる場をあたえてほしい」などの回答があったそうです。これらのことからもわかるように、子どもたちは意見を聞いてもらうこと、その上で一緒に、どうしたらよいか考えてもらうことを求めています。そのような機会をもつようにすることは、大人の役目なのだと思います。

また、子どもと先生との関係だけでなく、子どもと子どもの関係でも同じことが言えると思います。ＩＣＴを活用しながら互いの考えを見合えるようにしたり、役割を与えて一人一人が輝く場を作ったりす

る中で、その頑張りを認め合い、ポジティブな言葉をかけあえるようにしています。回答にもあるように、そのことが、それぞれの子どもたちの個別支援につながっていくのだと思います。

４　質問項目４「成果や課題」

上記のような個別支援を行った結果、以下のような成果が見られました。

表４　「取り組みの成果」回答一覧

登校・教室仕事への復帰	ある女子生徒は，身体障害があり家庭環境も厳しく愛着の課題が疑われる生徒で，教室に行きたくないということで別室での支援を行いました。 初めは，別室に来てもずっと寝ていてこちらの声かけにも無反応でしたが，不登校支援サポーターの方が上手く関わっていただき，愛着対象としての役割を果たしてくれたのか，少しずつ心を開き，現在は教室に戻ることができています。
	登校が難しい生徒は、カウンセラーと協力して、放課後に登校を促しています。（遠隔授業　Zoomは苦手らしいので出席できません）
	面接件数が増えた。
	保護者が自閉症の特性を早期からよく理解し、本人の就職後も適切な対応をし続けているケース（３事例）では、自閉症の程度の軽重に関わらず本人自身が遣り甲斐があると感じている仕事を正社員や正規職員として生き生きと続けることができています。
	マスクはなかなかつけることが出来ないので、保護者と連携し、喉や鼻を殺菌するスプレーで対応したりしている。予定変更については、生徒は予想に反して受け止めている。
友だちとのかかわり	・先の見えない環境の中で、オンラインでも友達同士の顔を見たり、話をすることができたことは効果があったと感じる。
	教師が個に応じたポジティブな声かけをしていたことで、教師が声をかけなくても子ども達が子どもたち同士で「それいいんじゃない！」などとポジティブな声かけをするようになった。教師に対する緊張がほぐれるにつれ、教師に対しても自分からツッコミを入れるのが上手になってきた。自分に対してだけかもしれないが、教室の中でよく明るい笑いが起き、とても良い雰囲気の中で授業が進められている。
	ピア・サポート学習では、スキルトレーニングにSEL－８Sを取り入れたところ、日常生活の中でキーワードを使えるようになり、トラブルが減ったり、学校適応感が向上した。
学級での継続した取り組み	12月、学級で「ハッピーツリー」の取り組みを提案、実施した。
	一定程度の児童からの反響はあり、クラス全体で継続して取り組めることが期待できる
保護者との連携	登校が難しい生徒は、カウンセラーと協力して、放課後に登校を促しています。（遠隔授業　Zoomは苦手らしいので出席できません）
	何よりも保護者の理解と協力が必要であると感じた。
一貫した支援の実施	一貫した学校適応に関する支援が行いやすくなった
その他	成果としては、たくさんの状況調査によって、いろいろな観点から生徒を理解することができた。SASAで気になる生徒、Q-Uで気になる生徒、アンケートで気になる生徒は重なる部分もあるが、重ならない部分もあり、面談の時の声掛けにつながった。 　学校行事や役割の充実は、生徒の自己有用感につながった。 　自己PRを書かせたことで、不登校の生徒も含めて全員が空欄なく自分のことについてしっかり書き込むことができた。回答者自身も生徒一人一人のよさを改めて理解することにつながった。
	相談の方法にもよるが、より継続を求める事例の増加。

別室や放課後での支援ができるようになったり、面談により不安やストレスなどを緩和できるようになったりしたことが考えられます。登校が難しい生徒については、保護者との連携により状況が好転したとの回答が見られました。また、個別の状況を把握した上での個別の声かけにより、生徒の自己有用感を高めることにもつながったとの回答も見られました。児童生徒の状況把握を学年・学校で共有することで、ピア・サポートの実践を含め、学校全体での取り組みのしやすさにもつながったようです。

上記のように、成果についての回答が 16 件見られたのに対し、課題も同様に 17 件見られました。

表５　「取り組みの課題」回答一覧

対応案件の増加	授業終了後、個別に対応しなければならない生徒が増え、対応しきれていない
	一方つながりが困難な学生への対応の限界
	徐々に信頼関係ができてきたが、そのために多くの時間を割かねばならない。
	面接件数が増えた。
遠隔対応による限界	会話はできたが，対面のようにはいかないと感じた
	面談やアンケートでは、問題が見えてこない。友達からのサポートをどのように思っているのか分からない。
欠席の長期化等	数日別室登校したが、もともと学校不適応があったため、長期欠席になってしまった。
	当初オンラインや授業のことに関する質問や連絡が多々あった学生が次第に連絡がなくなり、慣れている様子をみるとよかったと思う。一方で、退学してしまう学生もいた。
保護者との連携	保護者の時間の大半がそれに充てられ、保護者自身のそれ以外の自己実現がほぼ出来ないことや、保護者亡き後が、社会にとっての課題でもあると感じておりますが、その課題を解決する良策が見出せません。これにもピアサポートがうまく回れば理想なのですが。
	保護者の過放任もあり、保護者も含め本人と連絡が取れない時期が長い。
卒業後の支援	自閉症やその傾向のある方やその保護者は、学校段階では得られていた周囲からの支援が、大学卒業後には急に乏しくなったように感じ、卒業後の就職先の仕事を継続することが困難になってしまうケースが多いと実感しています。
組織	個別の対応になり、組織を動かして実践が、できない。

その他	課題としては、たくさんの状況調査は講習会がないと活用しきれないこと。Q-Uの分析については講習会もなかったことで、不十分だったと感じているし、効果の検証のためには複数回する必要もあったが実施できなかった。 　学校行事についてはゼロから作り上げたので、来年度以降どのように引き継いでいくかも課題と感じている。ともかく大変だった。 　自己PR用紙は回答者独自の取組みなので他クラスの担任とも共有していきたいと思っている。
	それぞれの良さを補完し合うということ
	不安が取り除かれると、子どもたちの表情は明るくなるが、まだまだ規制されることが多い。
	フィジカルディスタンスの保たせ方。
	ただ，２学期後半はまた教室に入れない日が時折あります。安定してくると大人の関わりも薄くなりがちなので，そうした愛情のエネルギーが足りなくなってきたシグナルだととらえ，声かけなどを心がけ，“ちゃんとみているよ”というメッセージを送るようにしています。 このような支援の必要な生徒は他にも複数います。別室で話をしたり，学習のサポートを行うことで，子どもの安心・安全のベースを作ることで，子ども達はエネルギーを得て，何とか教室に戻ることができます。ただ，そこで油断せず，がんばっている様子を励まし，「愛着の探索基地機能」を意識した支援が大切だと考えています。

特に、対応案件が増加していることや、遠隔での支援に対して限界を感じていることが気になります。適切な対応を行うためには、児童生徒を適切に把握することや専門性に基づいた個別支援が必要であると認識しているものの、教育課程の編成や消毒作業など、日常的な対応に追われ、そのための研修などに時間がとれない、または負担感を感じている様子がうかがえます。

＜質問項目４の考察＞

医療現場でも手術室などで主にしている手指洗浄やアルコール消毒、マスク着用が教育現場でも日常として実行するまでに、かなりの時間が費やされたであろう背景が挙げられます。それが浸透するまで家庭の協力なしでは徹底が難しかったと思われます。この前提があり、しかも感染拡大状況に合わせた教育活動としての修学、課外活動などを児童生徒らに提供をすることの困難さを多くの方々が体感されたことでしょう。教育課程の編成を迫られた現場も多かったことが予測できました。突然の休校や様々な行事の中止など、準備段階から意欲的に取り組み、楽しみにしていた児童生徒にとっては行事の開催が叶わず、とても辛い体験だったことだと思います。一方で仲間らと協力して活動することに戸惑いを感じていた児童生徒にとってはホッとできたことかもしれません。ストレスの対処法として闘争逃走反応というのがあります。闘うのか逃げるかということです。今回一旦は自宅に逃げ込み、各自の安全を確保しつつ、再登校し、勉学や諸活動に戻られています。その中で、遠隔授業が功を奏したもの、弊害だったものとあるようです。基本は児童生徒の状況を把握し学年・学校で共有しつつ、事案に応じで個別支援、ピア・サポートの実践対応をされ成果が確認されています。その一方でより専門的な関わりの必要性を感じつつも、日常的な対応に追われ、それらの対応に向けての十分な研修が開催できないことや、非常時の終着点が見えない状況下での負担感がより増しており、今回のような予想外な非常時の対応の難しさがより明らかになったと思われます。また日常に実行できていないことは非常時にもできない可能性が高いことも再確認できたことではないでしょうか。

コロナ感染拡大の
今こそ求められる
ピア・サポート活動の展開
―事例編―

アンケートに回答いただいた
取り組み事例を紹介します。

小学校①　福岡県　公立小学校　平井　陽伸

●登校しぶり、遅刻・不登校が増えたときの事例

ピア・サポートを活用した班活動

具体的に起きている課題

・感情のコントロールが苦手な子が多い（すぐに手が出る）。
・我慢ができない子が多い。

取り組んだこと、工夫したこと

・学校全体でピア・サポート学習を実施した。
・それぞれの学年に応じてスキル（トレーニング）を選び実施した。
・スキルのトレーニングの際には、マスクを着用してロールプレイを行ったり（資料①）、机を離して班交流を行ったり（資料②）して、コロナ対策を行った。※資料はどちらも３年生

資料①マスクをしてロールプレイを行っている様子

資料②机を離して班交流を行っている様子

取り組みの成果・課題

・学校行事がほとんどなくなったため、学校行事に絡めたサポート期間を設けることができなかった。
・学校全体で精度の高いピア・サポートに取り組むにはまだまだ研修等が必要。
・しっかりとピア・サポートに取り組んだ学年は成果が出た（トラブルが減った、学校適応感が向上した等）

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

・子どもたちの実態をそれぞれの教諭がしっかりと把握して、実態に応じたピア・サポート活動を今後も展開し続けていくことが大切であると考える。
・コロナ禍であっても、きちんと感染防止対策を行った上で、スキルのトレーニングを行っていくことが大事だと考える。

小学校②　群馬県　公立小学校　貴舩　裕子

具体的に起きている課題

・コロナ禍の現状も多少影響し、不安や恐怖が強くなっている児童生徒がみられる。
・その影響で教室に入れない児童生徒や周囲の目が気になる児童子が増えている。

取り組んだこと、工夫したこと

・自分理解と他者への配慮を心理テストを用いて話し合い
・担任のクラス運営の方向性と目標設定などをコンサルテーション

取り組みの成果・課題

・話し合い後、一定数の児童が感覚的に楽しんでいた。
・また、細部への浸透に関する課題や継続的な取り組みを観察する点などが課題としてあげられる。

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

・情報に流されてない自分軸と全体的に向けられる他者への配慮

小学校③　東京都　公立小学校　大谷　かおり

・学校公開や授業参観などがほとんど実施できていないため、児童の実態が保護者に伝わりにくい。また、保護者同士のかかわる場が作れないため不安があると頼る場所が学校しかない保護者がいる。

取り組んだこと、工夫したこと

・各家庭１名限定で校庭での学習活動（体育・生活科）の公開。
・音楽会では保護者限定の YouTube 配信　ＳＣによる相談活動の充実。

取り組みの成果・課題

・断片的ではあるが、児童の様子が保護者に伝わり、学校の取り組みに理解を得られた。事前の参加用紙やリボンなどの配布準備、当日受付担当などの負担をどのように解決していくかが今後の課題である。
・ＳＣが「たより」を出す回数を増やしたことで相談件数が増え、早期に支援につなげることができた。しかし、相談件数の増加による SC が多忙になり、日常の教室巡回が困難になった。

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

・マスク着用、ソーシャルディスタンスなどの制約がある中でより好ましいかかわり方をどう示してい

けばよいのか。
・今後も保護者の拠り所として学校が頼られることに、限られた時間の中でどこまで応えられるのか校内で話し合うゆとりがない。

【小学校の事例から】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

事例からは、コロナ禍の影響により、漠然とした不安や恐怖を感じて、教室に入れなくなったり感情のコントロールができにくくなったりしている子どもが増えているという現状がうかがえました。そのような状況であるからこそ、自分や友だちの気持ちなどを知り合うことが大切だと感じ、心理テストやピア・サポートに取り組んだ事例が報告されています。学校全体でピア・サポートに取り組んだ事例からは、トラブルが減ったり、学校適応感が向上したりした、という成果が見られていることからも、不安な気持ちを抱きやすい今だからこそ、十分な感染防止対策を行った上で、人と触れ合うよさ、心が通い合う良さを味わえる機会を設定できるよう、カリキュラムマネジメントを進めることが有効であると言えます。

また、保護者も、先行きの見えなさ等に不安を感じていることから、保護者に対する情報共有をしっかりと行うことが必要なのだと思います。子どもの学校での様子を知らせる機会や、保護者同士が関わる機会を作るようにすることで、コロナ禍の今だからこそ、これまで以上に、学校と家庭とが一緒になって、子どもを支え育むことができるのだと思います。

同時に、教職員のサポートや配慮も大切です。コロナの感染拡大防止に向け、教職員は日々の消毒作業や、時間割や学習内容の調整など、これまでとは違う対応を行わなければならなくなりました。子どもたちのためであれば何をおいても取り組みますが、結果的に業務量が増えている、という感覚は否めません。それによるゆとりのなさが、配慮の必要な子どもたちの変化を見逃したり、きめ細かい対応がおろそかになったりすることが心配されています。まずは軽減できる業務を見直すなど、教職員への配慮もある学校組織であることが、安心できる学校づくりにつながるのだと思います。

中学校①　大阪府　公立中学校　米田　成

●登校しぶり、遅刻・不登校が増えたときの事例

ピア・サポートを活用した班活動

気になること

私は中学１年生の学年主任を担当しています。５月いっぱいが休校（週に１～２回，１回１時間程度の登校日あり）で、６月から授業再開となりました。

登校日の時は、全員が登校していましたが（学年 55 名）、２校の小学校から入学してくる学校で、互いに気を使い会話もなく緊張している様子でした。

その後授業が再開し通常の学校生活が始まると、徐々に遅刻や欠席が増え始めました。厳しい家庭環境で保護者のサポートも得にくい状況とコロナの影響で、上手く仲間関係を結べず、学習面では、「遅れを取り戻すためにがんばろう」とどの先生からも言われ、もともと学力的にもしんどい子ども達は、学校に行く理由を見失っていたのではないかと思います。

現在は、毎朝 10 名ほどがいない状態でスタートします。電話連絡、家庭訪問などの働きかけで、遅れて登校してきますが、欠席は大体毎日入れ替わりで５名ほどいます。全く登校しない生徒はおらず、別室や SC との面談など、何らかの形で出席はしています。それでも、２月末時点で、欠席日数が年間 30 日に達し「不登校」にカウントされた生徒が９名いました。

具体的に起きている課題

特別支援学級在籍生徒が８名おり，それ以外にも発達や愛着の課題が疑われる生徒が多数います。彼らには、仲間関係を結ぶ取り組みを丁寧に進める必要があります。しかし、今年度はコロナの感染対策で、こうした機会を飛ばして学校生活が始まりました。そのため、もともと課題の大きな子ども達は、以下のような課題、問題を抱えることになってしまったと考えています。

・登校しぶり
・遅刻，欠席
・不登校
・教室に入れない
・別室に来ても寝てばかりいる
・学習のつまずき
・ケンカすらしない（ケンカするほど仲良くなっていない）

取り組んだこと、工夫したこと

子ども達が学校に安心して登校する際のモチベーションの一番は、やはり友達に会えることだと思います。そこで、ピア・サポートプログラムを活用した班活動に取り組み、学年・学級が安心・安全な場所になるように努めました。

（１）日常の班活動

①班長会議（PSP の計画）

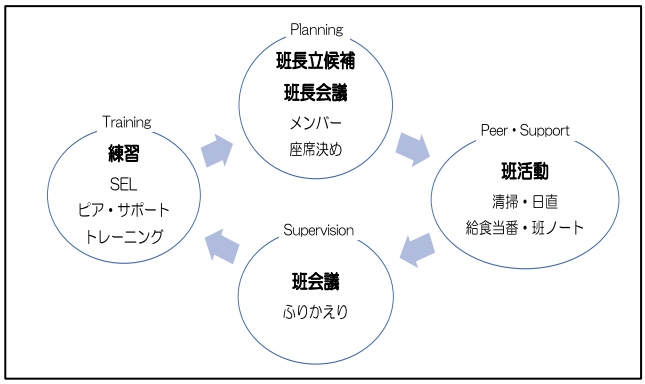
立候補で選ばれた班長が、班長会議を行い、課題のある仲間に配慮しながら班編成と座席決めを行いました。

②授業・清掃・日直・給食当番など（PSP の活動）

日々の学校生活では班単位での活動を班長を中心に行いました。

③ふりかえりの班会議（PSP のふりかえり）

５週間を１単位として班替えを行う際、班ごとに自分たちの班活動の成果と課題をふりかえる班会議を行い、学級で発表・共有を行いました。



ピア・サポートプログラムを活用した班活動

④SEL の授業や班長への PST（PSP の練習）

「話の聴き方」「わかりやすく伝える」「話し合いのスキル」などの SEL の授業を学級全体で行いました。また、班長だけを対象にピア・サポートトレーニングのワークを実施しました。

（２）班長をピア・サポーターとしての行事

◇**「班別フィールドワーク」**

校外学習として班別フィールドワークを行いました。下記の各活動の前後には「合同班長会議」として、班長を集めて，活動のふりかえりと PST のワークを行いました。

PST：上手な話し合いのやり方

活動：校外学習の行き先決め

PST：ふりかえりと説明の仕方

活動：経路調べ

PST：当日予測されるトラブルと対処法

活動：フィールドワーク当日

合同班長会議② ワークシート

ある班では、次の４つのトラブルが発生してしまいました。どのように対処すればよいか、自分の意見をまとめ、グループで話し合ってみましょう

＊トラブル①　班のメンバーがはぐれてしまい、どこに行ったかわからなくなってしまった
＊トラブル②　班のメンバーがエンジョイエコカードをなくしてしまった
＊トラブル③　他の学校の生徒にからまれて、脅られてお金を取られてしまった
＊トラブル④　学校にもどるのに、集合時刻の 15：00に間に合いそうにない

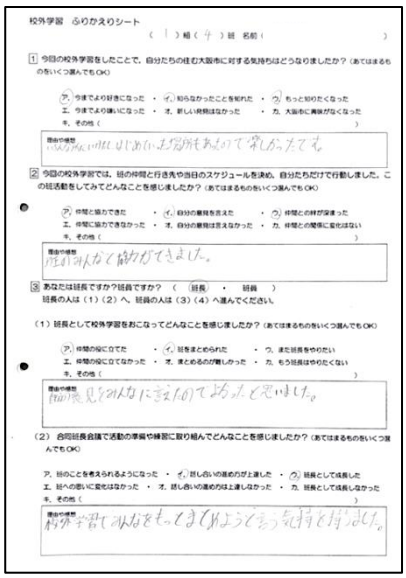
＊自分の意見

トラブル①	トラブル②
トラブル③	トラブル④

＊グループで解決策

トラブル①	トラブル②
トラブル③	トラブル④

合同班長会議ワークシート


校外学習　ふりかえりシート

（ 1 ）組（ 4 ）班　名前（　　）

1 今回の校外学習をしたことで、自分たちの住む大阪市に対する気持ちはどうなりましたか？（あてはまるものをいくつ選んでもOK）

ア．今までより好きになった　・イ．知らなかったことを知れた　・ウ．もっと知りたくなった
エ．今までより嫌いになった　・オ．新しい発見はなかった　・カ．大阪市に興味がなくなった
キ．その他（　　）

理由や感想　いろんなはじめていった場所もあるので楽しかったです。

2 今回の校外学習では、班の仲間と行き先や当日のスケジュールを決め、自分たちだけで行動しました。この班活動をしてみてどんなことを感じましたか？（あてはまるものをいくつ選んでもOK）

ア．仲間と協力できた　・イ．自分の意見を言えた　・ウ．仲間との絆が深まった
エ．仲間に協力できなかった　・オ．自分の意見は言えなかった　・カ．仲間との関係に変化はない
キ．その他（　　）

理由や感想　皆が協力してくれました。

3 あなたは班長ですか？班員ですか？（　班長　・　班員　）
班長の人は（1）（2）へ、班員の人は（3）（4）へ進んでください。

（1）班長として校外学習をおこなってどんなことを感じましたか？（あてはまるものをいくつ選んでもOK）

ア．仲間の役に立てた　・イ．班をまとめられた　・ウ．また班長をやりたい
エ．仲間の役に立てなかった　・オ．まとめるのが難しかった　・カ．もう班長はやりたくない
キ．その他（　　）

理由や感想　自分の意見をみんなに言えたのであったと思います。

（2）合同班長会議で活動の準備や練習に取り組んでどんなことを感じましたか？（あてはまるものをいくつ選んでもOK）

ア．班のことを考えられるようになった　・イ．話し合いの進め方がよくなった　・ウ．班長として成長した
エ．班への思いに変化はなかった　・オ．話し合いの進め方は上達しなかった　・カ．班長として成長しなかった
キ．その他（　　）

理由や感想　校外学習でみんなをもっとまとめようと言う気持ちを持ちました。

校外学習ふりかえりシート

◇「モザイク壁画制作」

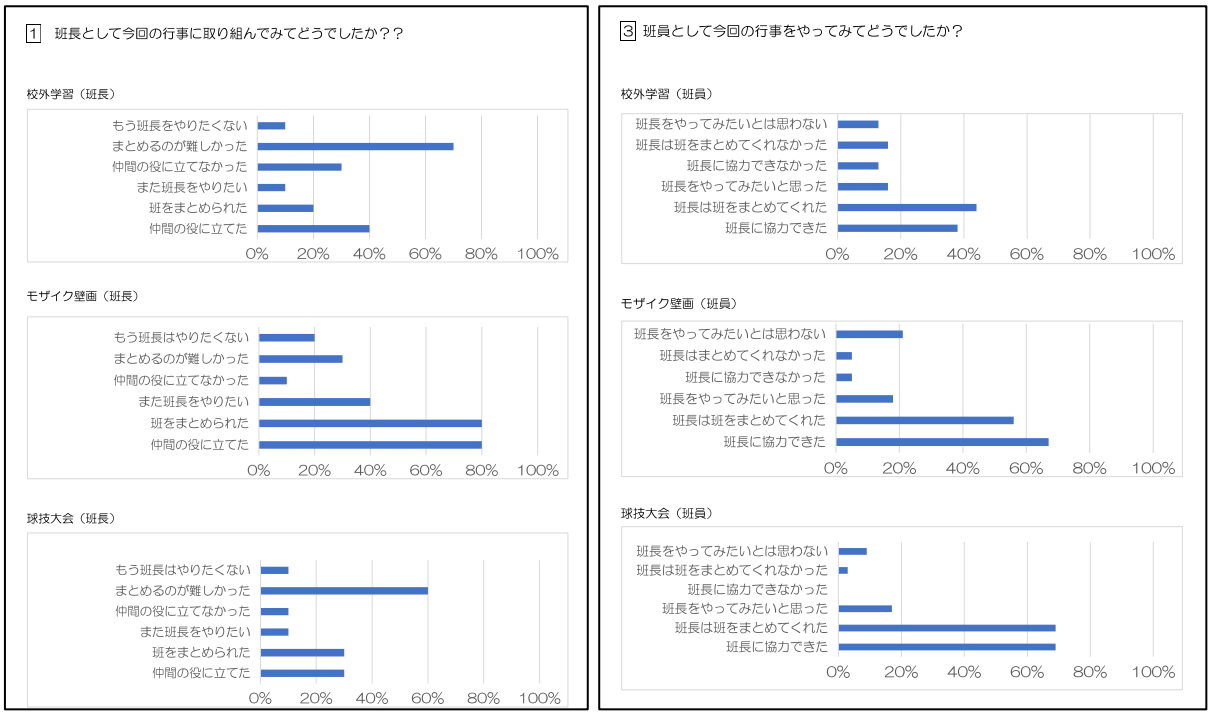
展示のみの開催となった文化祭への出展作品として、「モザイク壁画」の制作に取り組みました。班長に制作方法を伝え、班長を中心に班単位で割り当てられたパーツの制作をしました。
班長には、上手に説明することをめざして、PSTの「一方通行と双方向のコミュニケーション」のワークに取り組みました。

◇「球技大会」

班単位でチームを編成し，球技大会本番前に２回の練習を行いました。練習前には、「合同班長会議」を開き、話し合いのワークや練習計画の立て方のワークを行いました。練習後にはふりかえりも実施しました。

取り組みの成果・課題

・PSP に期待されるサポーターの「自己有用感」の高まりにはまだ至っていませんが、サポートを受ける生徒は、班長の努力を認め班長の成長を感じ、積極的に班に貢献しようとする姿勢が育っています（アンケート結果から）。その結果、学級・学年に仲間意識が育ち、困っている仲間に目を向けられるようになってきたと感じています。こうした取り組みを、別室での個別支援と並行して行うことで、学級に，別室から教室に戻ることを決めた生徒を迎え入れやすい環境が整えられており、教室復帰を可能していると考えられます。ただ、班長はまだ上手くできているという感覚には至っていないのと、班員は「大変そうだから自分には難しい」と感じているのが課題と言えると思います。



校外学習・モザイク壁画・球技大会のふりかえりのまとめ（左：班長，右：班員）

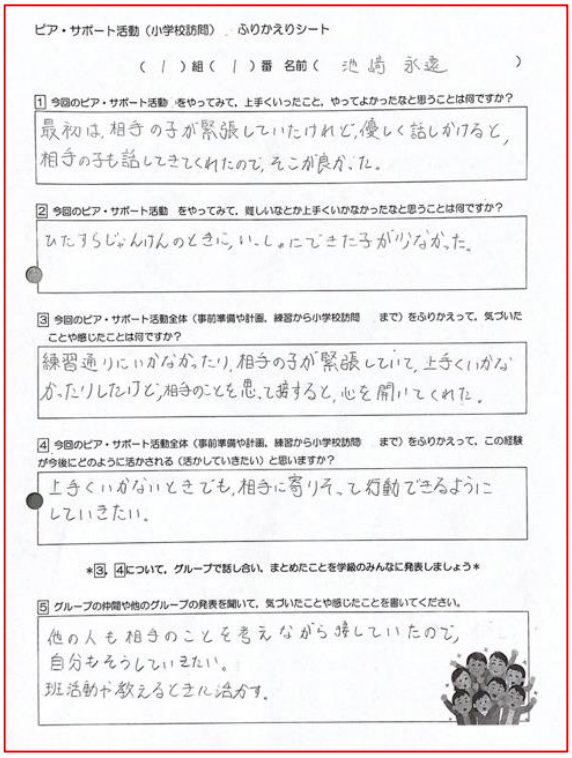
今後の取り組み課題、大切にしたいこと

＜取り組み課題について＞

子ども達に，「自分たちはできる」という感覚を持ってもらうことが今後必要だと考えています。そこで、３学期には小学２年生へのピア・サポート活動を実施しました（２月と３月の合計２回を予定していましたが、コロナの影響で３月の１回のみ実施）。学年のすべての生徒にサポーターとしての役目を担わせることで、「自己有用感」の向上をめざし、より一層支え合える集団に成長させたいと考えて行いました。

この活動を通じて、多くの生徒が、年下の子をサポートすることの難しさを感じつつも、どうすればうまくいくかを考え、適切なスキルの発見をすることができ 相手の気持ちを思いやることの大切さを感じることができました。

今後の課題としては、何と言っても「継続」だと考えています。ピア・サポートを通じて子ども達に身につけさせたいものは、数回の活動で達成できるものではありません。繰り返し取り組ませ、ふりかえりを行い、練習をして改善を図る…。そうした地道な取り組みの積み重ねの中で、仲間を大切にし、互いに支え合い、そこにいれば安心と安全を得られる学年集団に成長させていきたいと考えています。


ピア・サポート活動（小学校訪問）　ふりかえりシート

（　1　）組（　1　）番　名前（　池崎　永遠　）

1 今回のピア・サポート活動をやってみて，上手くいったこと，やってよかったなと思うことは何ですか？

最初は，相手の子が緊張していたけれど，優しく話しかけると，相手の子も話してきてくれたので，そこが良かった。

2 今回のピア・サポート活動をやってみて，難しいなとか上手くいかなかったなと思うことは何ですか？

ひたすらじゃんけんのときに，いっしょにできた子が少なかった。

3 今回のピア・サポート活動全体（事前準備や計画，練習から小学校訪問　まで）をふりかえって，気づいたことや感じたことは何ですか？

練習通りにいかなかったり，相手の子が緊張していて，上手くいかなかったりしたけど，相手のことを思って接すると，心を開いてくれた。

4 今回のピア・サポート活動全体（事前準備や計画，練習から小学校訪問　まで）をふりかえって，この経験が今後にどのように活かされる（活かしていきたい）と思いますか？

上手くいかないときでも，相手に寄りそって行動できるようにしていきたい。

＊3，4について，グループで話し合い，まとめたことを学級のみんなに発表しましょう＊

5 グループの仲間や他のグループの発表を聞いて，気づいたことや感じたことを書いてください。

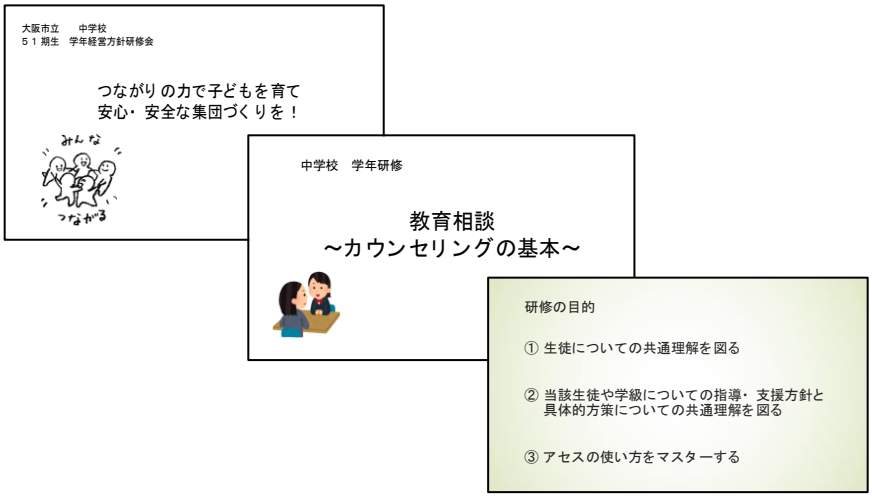
他の人も相手のことを考えながら接していたので，自分もそうしていきたい。
班活動や教えるときに活かす。

小中連携ピア・サポート活動のふりかえり

＜教員集団の理解について＞

ここまでに述べたような教育活動の必要性は、まだまだ多くの教員が共通理解できているとは言えません。今年度は、これまでに学年単位ではありますが、下記のような教員研修を行いました。こうした研修を通して、子ども達の状況を正しく見立て適切な支援を計画・実施できるようにすることが大切だと考えています。

【今年度行った研修】
- MLA の概要説明
- 教育相談（カウンセリング）研修
- アセス研修（事例検討）



中学校② 福井県　公立中学校　塚田　孝子

●コロナで不安が高いときの事例

「つながる」工夫

気になること

特に自営業（飲食店）の家の生徒について影響があると感じました。家庭を心配したり、手伝いをしたりと以前より家庭に目を向けている様子がうかがえました。また、保護者が医療従事者の生徒が、一時期ピリピリしていたこともありました。生徒の身近に PCR 検査を受けた人がいたり風邪症状があったりして、やむを得ず欠席しないといけない時があり、そのようなときは教職員も家族も不安が高かったです。

日頃は手洗いやうがい、消毒はまめにしていたものの、ソーシャルディスタンスは校内ではあまり守らせることができませんでした。受験や学校行事が無事に行われるようにという、祈るような気持ちは生徒達から日々伝わってくるし、それらが無事行われるように尽力している先生や家族に感謝する気持ちも伝わってくる…。

そのようなことから、どちらかというと、コロナのお陰で気づけたこと、つながれたこと、工夫できたことというプラスの影響が大きいのではないかと感じています。

具体的に起きていること

課題と感じていることは、ソーシャルディスタンスの意識が低いこと。家族が家の中でソーシャルディスタンスをとらないように、生徒達も学校内ではソーシャルディスタンスをなかなかとることができないでいることです。

また、学校行事のやり方や内容一つ一つを検討し、これまでとは違う形にしていかなければいけないことに、担当者の負担がかなり大きいです。しかし、勤務校では（ポジティブ教育に取り組んでいることもあり、）逆境にかえって燃えています。

学校、学級などで取り組んだこと、工夫したこと

（１）生徒の状況の把握

休校中は担任と部活動の顧問が全員の生徒にそれぞれ電話をしたり、ホームページやメールなどでまめに連絡事項を伝えたりしました。また、分析のための講習会を全教職員で受けた上で、SASA（福井県独自の学力調査）の質問紙調査（生活や学習に関する質問紙）も前期と後期の２回行ったり、Q-U や「ちょっと聞かせてアンケート」も学期ごとに３回行った上で、個人面談をたびたび実施したりして生徒の状況把握に努めました。

また、生徒達に自己 PR として「長所、短所、趣味、特技、家での役割」それぞれの生活に合わせたものを作成して書かせました。

（２）気がかりな生徒の情報共有と個別支援

気がかりな生徒については、学年会で報告し、学年の全教員で共有し、担任の関わりだけで不十分なときは、学年主任、進路主任、生活担当、相談担当などが状況に合わせて関わるようにしました。ケース会議も定期的に行っています。

また、保護者面談や家庭訪問も定期的に行っています。対人恐怖で登校できない生徒については、適応指導教室において、ついたて越しに SSW をはさんでの面談をするなど個に応じた関わりをしています。状況調査は、個別支援としては面談に活かしました。

（３）学校行事等の工夫

学校祭もこれまでとはやり方を変え、準備期間も短かったですが、それでも「一人一役」を大事に、全ての生徒にやりがいと達成感を味わわせたいと思ってそれぞれの教員が生徒たちに関わるようにしました。回答者は装飾担当で初めての役割でしたが、装飾係を希望して集まってきた６０人すべての生徒に必ず達成感を味わわせたいと思い、何度もいろいろな形で話し合いをさせて、役割の内容や方向性を固めていきました。学校祭後、生徒達も「装飾係をやってよかった！」と言っていましたが、回答者自身がやりがいを感じさせてもらえたと思っています。

学校祭の後には、それぞれの係で下級生が「ありがとうカード」を３年生に書き、３年生は同じ係の仲間や下級生に「ありがとうカード」を書いて感謝の気持ちを伝え合いました。「ありがとうカード」を書くことで、自分の役割について確かに存在感があったと感じたり、自分が役に立ったと感じたりした生徒が多かったように思います。

学校祭の装飾係としては、ファイルを作成し、ミーティングで話し合ったことや使ったワークシート、教師側から与えた資料や活動のヒント、生徒のアイデアなどをファイリングしました。是非、来年度も引き継いで欲しいと思っています。

状況調査は、学級の状況から、どのようなピア・サポート活動をしたらよいかを担当者で話し合う材料としました。

その取り組みの成果、課題

・たくさんの状況調査によって、いろいろな観点から生徒を理解することができました。SASA で気になる生徒、Q-U で気になる生徒、アンケートで気になる生徒は重なる部分もあるが、重ならない部分もあり、面談の時の声掛けにつながりました。

・学校行事や役割の充実は、生徒の自己有用感につながりました。学校祭だけでなく、生徒達に何かにつけて役割を与え、存在感や有用感をもたせたことで様々な場面で様々な生徒が輝くことができたように思います。そのことが、それぞれの生徒への個別支援にもなっていたのではないかと思います。生徒達は、制限された生活の中に今まで気づかなかった充実感を発見していたことが振り返りなどからうかがえました。

・自己 PR を書かせたことで、不登校の生徒も含めて全員が空欄なく自分のことについてしっかり書き込むことができました。回答者自身も生徒一人一人のよさを改めて理解することにつながりました。

・課題としては、たくさんの状況調査は講習会がないと活用しきれないことです。Q-U の分析については講習会もなかったことで、不十分だったと感じているし、効果の検証のためには複数回する必要もあったが実施できませんでした。

・学校行事についてはゼロから作り上げたので、来年度以降どのように引き継いでいくかも課題と感じています。ともかく大変でした。
・自己 PR 用紙は回答者独自の取り組みなので他クラスの担任とも共有していきたいと思っています。

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

・生徒の状況把握に努めることです。与えられた状況の中で、生徒達が最大限の力を発揮できる手立てを考えること。個に配慮しながら、生徒達一人一人が「できたな」、「頑張ったな」と思えるピア・サポート活動の手立てを教職員間で相談しながら考えていくことです。

（市立中学校教諭からの聞き取りをもとに紹介）

※福井県版ポジティブ教育
福井県教育総合研究所教育相談センターが作成した、児童生徒に「幸福を自ら創り出していく力」を育てるためのピア・サポート活動、ソーシャルスキル教育、レジリエンス教育の３つのプログラムを活用した教育

中学校③　兵庫県　公立中学校　嘉ノ海　仁士

●先輩の伝統を「つなぐ」

コロナ禍での「学校行事」や「たつの市中学生サミット」

具体的に起きていること

コロナ禍では、全校生が一斉に集まることが困難なため、今まで行ってきた学校の取組（伝統）等が次の学年へ伝わりにくい現状があります。今年度は特に、上の学年から学び、育っていくことが難しくなっています。また、現在も新型コロナウイルスの収束の見通しがつきにくく、今までのことが通用しないため生徒・教職員とも、不安な日々が続いているのが現状です。その中で、常に感染防止対策を視野に入れながら、行事の実施の可否等を検討していかなければなりません。

学校、学級などで取り組まれたこと、工夫されたこと

コロナ禍だから、行事はできないと最初から判断するのではなく、制限された中でできることを模索していきました。例えば、体育大会では、密にならないように競技内容の工夫をしたり、保護者の人数制限等を行ったりしました。また、「３年生を送る会」では、会場が密にならないよう３年生のみにし、後輩たちのメッセージは自作 DVD の中に盛り込むなど、常に感染予防を視野に入れ、学校行事の工夫を行いました。

例年、市内中学校の生徒会役員（６校：計１８名）が集う「たつの市中学生サミット」については、今年度は、一斉に集まらずに竹内和雄先生（兵庫県立大学）のファシリテーターのもと、リモートで行いました。そこでは、各学校の生徒会役員が学校での取組紹介をした後、オンライン上で各グループに分か

れ、本市のスマホの現状や今後の具体的な取組について議論し、その内容を深めることができました。

その取り組みの成果、課題

「どうすればできるのか」という視点で探っていると、よりよいアイデアが出てくるものです。例年のように実施することができれば、今より充実した内容が期待されます。一方で、今回のようにさまざまな工夫をし、一つ一つの取組についてじっくりと考えることによって、生徒・教職員のモチベーションが高まり、例年よりも思い出深いものになったのではないでしょうか。

また、「たつの市中学生サミット」では、コロナ禍の中でも、同じ中学生が仲間と協力し取り組んでいる姿を共有することができ、ともに頑張る仲間がいることを知り、安心感を持つことができました。他校生とのディスカッションが意味深いものとなった一日でした。

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

コロナ禍では、生徒も教職員も、柔軟な発想が求められます。従来の取組に工夫を加えることで、先輩たちの伝統をつないでいく意識も生まれています。そして、このような状況だからこそ、今後も「仲間が互いに支え合い課題を解決していく」というピア・サポートの考え方を大切にしていく必要があります。

中学校④　群馬県　公立中学校　古市　由香里

具体的に起きていること

新年度スタートしてすぐに休校になったため、仲間と関わりをもてない生徒が多く見られました。集団生活への不適応から不登校傾向の生徒も見られます。

学校、学級などで取り組まれたこと、工夫されたこと

感染対策を講じた小グループ内での話合い活動や学級内でのエンカウンター、さらに、クラス委員を中心に休み時間等を利用したメッセージ交換の活動を行いました。

その取り組みの成果、課題

小グループ内での話し合い活動やメッセージ交換の活動では、話すことや関わることへきっかけができ、楽しく行うことができていました。またメッセージを互いに書いて渡すことで、互いにつながりができました。しかし、学級内でのエンカウンターでは集団内で自分から動くことが難しい生徒もいて、一斉に行うことで際立つことになってしまいました。

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

一人一人の生徒が自分の気持ちを素直に表現し、それぞれに周囲の人とつながれるようにしたいです。

中学校⑤　新潟県　公立中学校　加藤　智美

具体的に起きていること

生徒は新型コロナウイルス感染拡大防止の対策により、休校、分散登校を経験しました。新１年生は入学式を終え、すぐに休校になり、なんらかの不安を抱えている生徒がいました。

小学生時代に意外と活発であった生徒ほどネガティヴな気持ちになっていたことが、１０月の教育相談によるアンケートからわかりました。また、学校行事や PTA 活動が中止になりました。

最高学年になった３年生は、学校行事で「今まで先輩たち教わったことを後輩に伝えたい」という気持ちを抱いていましたが、行事が中止になったため、その機会を失いました。生徒は、残念な気持ちをこらえ、中学校生活を送ることになりました。楽しみにしていた二泊三日の関西方面への修学旅行が中止になり、県内日帰りのバス研修になりました。予定通りいかないなりにも、生徒なりに学び楽しんできてくれたことが救いです。体育祭や合唱祭など感染拡大防止に努め、授業参観等ができないなど様々な制約が多々ありました。しかし、保護者の協力のもと体育祭や合唱祭を実施することができました。

学校、学級などで取り組まれたこと、工夫されたこと

体育祭、合唱祭等　地域、保護者の協力を得て、入場の際には健康観察表の提出していただきました。合唱祭では、生徒一人につき、家族二人までなど入場制限をかけました。

生徒は、活動が制限される中でも、生徒会や各行事の実行委員会を中心に、「できることを見つけ、自分たちの力で行事を成し遂げよう！」と前向きに計画し、実行しました。

その取り組みの成果、課題

細分渡り計画を立てたので、安心して行事を開催できました。しかし、それまでに開催できるかどうか、教職員の話し合いの中で、ギスギスした意見の食い違いもあり、学校の方針を決めるにも苦労しました。

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

感染拡大防止を考えながらも、できる活動を保証することです。人とのコミュニケーションが制約がされることが多いので、可能な限りの行事や教育活動を保障していくことを大切にしていくことで職員の意見はまとまってきました。

【中学校の事例から】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

コロナ感染拡大のもとでの生徒の状況について、リアルな報告がいくつかありました。そこには、厳しい家庭環境、うまく仲間関係を結べない、学習面での遅れや格差の拡大といった背景もあり、登校しぶりや不登校の増加、教室で寝てばかり、けんかすらしない関係の乏しさ、仲間と関わりを持とうとしない、抱える不安の幅も個人差があるといった状況が生まれてきました。先輩の取り組む姿を見て育ってきた伝統、文化の継承にも支障が生じました。

そのような状況を踏まえて、実践事例の中では、「子どもたちが安心して登校するモチベーションは友達に会えること」と、ピア・サポートプログラムを取り入れながら、生徒をつないでいく報告がいくつもありました。たとえば、学級全体での「ＳＥＬ（社会性と情動の学習）の授業」、班長を対象にしたピア・サポートのトレーニングなどが、班別のフィールドワークや日常生活に活かされ、別室登校生徒を受け入れる教室の環境が整えられていきました。また、生徒の状況を把握するための「生活や学習に関するアンケート」「ちょっと聞かせてアンケート」等の結果は、生徒面談、個別支援、保護者支援等にも活かされていきました。「学校祭後の３年生と１、２年生によるありがとうカードの交換」「小グループでの話し合い活動」「学級でのメッセージの交換と返信」「グループ・エンカウンター」等の取り組みも工夫され、生徒同士がつながっていくきっかけになっていました。教職員による教育相談研修、事例検討会、アセス（学校環境適応尺度）に関する研修、保護者面談などの取り組みも行われていました。

未経験の困難を抱えながらの教育実践に際して大切にされた視点としては、「コロナ感染の中だからこそできることを考えよう」「自分の気持ちを表現することで、周囲の人とつながっていこう」「今だからこそポジティブ教育（ピア・サポート活動）を工夫しよう」等がありました。そこには、生徒の意見や声を聴こうという教師の姿勢や誰かのために今できることを考えようという生徒の姿勢があったからこそ、つながって生きるための工夫が生まれていきました。こうした教育実践が、ピア・サポート活動そのものでもあると言えるのではないでしょうか。

高等学校①　兵庫県　私立通信制高等学校 中岡　隆吉

●臨時休校で対面できないときの事例

新しい学びの形、遠隔授業（ZOOM）の活用

具体的に起きていること

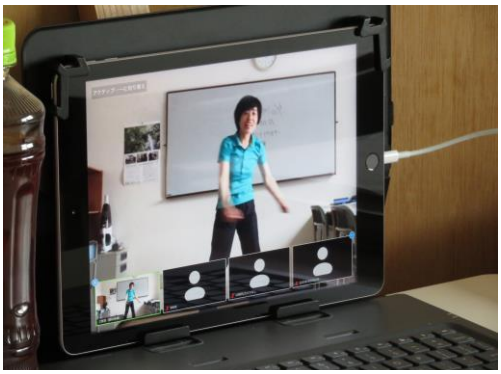
遠隔授業（Zoom）を取り入れ、遠隔授業と対面授業を組み合わせて教育活動を行っています。多くの生徒が遠隔授業に慣れ、上手に学ぶことができています。事前に Wi-Fi などのネット環境をチェックするとすべての生徒がネット環境は整っていました。（通信制の高校なので、もともとネットを使っていたので）。遠隔授業導入でのプラス面は授業の出席率が UP したことです。（好きな授業を選択して受講するスタイル）。遠くから通っている生徒もいるので Zoom だと出やすいようです。

デメリットは、Zoom で画面を見続けると頭痛がする生徒も数名でました。操作に不慣れな生徒や職員もおり、授業が中断することもありました。（徐々に慣れていくことで改善できました）
課外活動・特別活動も制限があり、修学旅行など、いくつかの活動が中止になりました。屋外の活動、飲食を伴わないものは積極的に実施しています。
体育祭などもできました。文化祭は Zoom を使って実施するなどいろいろと工夫して対応しています。

zoom 文化祭

学校、学級などで取り組まれたこと、工夫されたこと

遠隔授業は午前中、午後から対面授業の組み合わせで、どちらにも対応できるようにしています。現在はほぼ対面授業で時々遠隔授業にしています。始業式・終業式など多くの生徒が集まる活動は Zoom で実施しています。



zoom 体育

zoom 授業

その取り組みの成果、課題

遠隔授業の課題は、教員の ICT スキルの差がでることです。使い慣れていないのでよくトラブルが起こる先生もいます。（声がちゃんと聞こえないなど）

生徒のメンタルのケアに Zoom を使った面談も取り入れています。Zoom 進路相談　Zoom 教育相談　Zoom カウンセリング等。（生徒が顔を出さなくてもいいなどの配慮は必要）

zoom 保護者会

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

通信制高校のメリットを活かし、どのような状況でも、柔軟に考え、対応することでできています。新しい学びのスタイル、高校教育を構築していきたいと考えています。

高等学校②　大阪府　公立高等学校　坂本　高英

具体的に起きていること

コロナ休校以来不登校になった生徒がいます。

発熱があるとすぐ出席停止になり、授業の理解が十分できなくなり、授業についていけなくなる生徒がでてきました。

大学全体で取り組んだこと、工夫したこと

あらかじめ対応する生徒の準備をしておき、できるだけ待ち時間を少なくして個別対応できるように工夫しました。

取り組みの成果と課題

何とかついていけるようになってきました。

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

出席停止になった生徒が家庭でも学習できるような工夫を考える必要があります。

生徒たちがお互い支え合い、助け合えるような雰囲気作りと工夫が必要だと考えています。

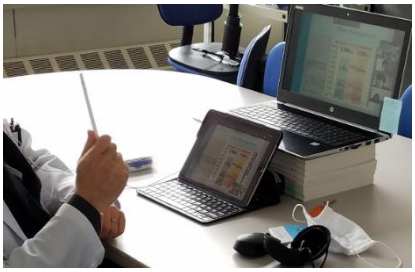
高等学校③　北海道　私立高等学校　佐藤　革馬

具体的に起きていること

臨時休校が多く、生徒たちの人間関係がやや薄く、逆説的ですが、対人関係によるトラブルが例年に比べ少ないと感じています。

元々中学校では不登校傾向の生徒が、今年度の休校期間が長く、高校生活リズムを作る前にリズムに乗りきれず、不登校に戻ってしまったことがありました。

学年全体で取り組んだこと、工夫したこと



私の学年では一人一台の iPad を貸与しているので、休校期間中であっても、人間関係の構築ができるようにオンラインで SHR を実施したり、オンラインでグループ面談（写真）を実施したりしました。

オンライン SHR では「出会いの場」となるように、いつもクラス開きのときに行っているアイスブレイクを zoom のブレイクアウトルームを利用して何度か行いました。具体的には、４人グループを作り、ワンテーマについて一人 30 秒で話す、聞き手は画面越しなので大きくうなずいてください、というルールを説明してからブレイクアウトルームに誘導しました。「中学生のときにで一番楽しかったこと」、「出身中学校のプチ自慢を一つ教えて」「高校で楽しみにしていることは」など、ポジティブな答えになるようなテーマを与えました。

取り組みの成果と課題

臨時休校による人間関係が作れず、不登校に戻ってしまう生徒もいましたが、多くの新入生は、休校期間の影響が少なくなったと感じます。オンライン SHR に参加した生徒からは「休校が終わって学校が始まったときに、もっと話したいと思う友だちができました。学校が楽しみ」という感想が寄せられました。できるところから始めようと ICT に取り組みましたが、ICT に不慣れな教員の場合、オンライン SHR のような活動ができず、学校が再開してからのクラス開きになったため、なかなか人間関係が作れない生徒が出てしまい、クラスによって温度差ができてしまったことが課題でした。

今後の取り組みの課題　大切にしたいと思っていること

ピア・サポートトレーニングを対面で実施したいところですが、ICT を活用してピア・サポートトレーニングを行い、生徒同士の支え合う学年づくりをめざします。

高等学校④　　北海道　公立高等学校　井上　郁子

具体的に起きていること

　コロナ不安による欠席は、出席停止扱いになるため、安易に欠席する生徒も多いです。陽性者が体調回復後、学校に来れなくなった事例があります。

大学全体で鳥君ｄこと、工夫したこと

　コロナ感染は誰にでも起こりうることなので、感染者を特定したり、差別をしないよう呼びかけたり、文科省の差別をしない、させない動画の視聴に取り組みました。

取り組みの成果と課題

ＳＮＳが当たり前になっている状況のため、色々な情報や噂などはすぐに流れてしまいがちです。

今後の取り組みの課題　大切にしたいと思っていること

Withコロナの中、制限があっても、自分らしく楽しみや喜びを見つけられるようたくましく、命の尊厳と思いやりを持って、コロナ禍を乗り切ってほしいです。

【高等学校の事例から】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

　「具体的に起きていること」として、学校全体のこととしては、「学校行事の中止」や「課外活動の制限」といった回答がありました。個別の事例としては、「コロナ休校以来、不登校になった」「コロナ陽性者が体調回復後も学校に来られなくなった」「安易に欠席する生徒が多い」といった、欠席の増加に関連する回答が多く見られました。これらは、登校できなかったことが、登校可能になってからもそのまま持ち越されてしまったという共通点があります。そのほか、「家族間の不和が増加・悪化」「摂食障害を発症するケースが増えた」「SNS 等への依存が強くなった」といった報告がありました。これらのことは在宅時間が増えたことと密接に関係していると思われますが、登校可能になったからと言っても簡単には解決しない課題であり、慎重な対応が求められます。

　取り組みや工夫点として「（通信制高校での）遠隔授業と対面授業の組み合わせ」「相談室便りの発行増加」「休校中の緊急アンケート」「オンライン SHR・面談」「感染者の特定や差別をしないことの呼びかけ」「文科省の差別をしない、させない動画の視聴」といったことがあげられ、学校の実態に即したさまざまな工夫がなされていました。

　取り組みの成果としては、「アンケート結果をクラス運営や生徒観察に活用してもらう」「生徒のメンタルケアに Zoom 面談を取り入れている」といったことがあげられました。課題としては「遠隔授業の課題として、教員のスキルの差が出る」「SNS が普及しているため、情報や噂がすぐに流れてしまう」「コロナ感染症予防や授業が遅れないことが中心となり、心に対する取り組みまで行えていない」といったことがあげられました。一定の成果があがった反面、コロナ対応に手を取られ、慣れないことに取り組む大変さや、余裕のない学校現場の実態が浮き彫りになりました。

今後の取り組みや大切にしたいこととして、「ICT を活用したピア・サポートトレーニングの実施」「出席停止になった生徒が家庭でも学習できるような工夫」「柔軟な考えで新しい教育スタイルに取り組む」といったことがあげられました。学校現場では、コロナ禍の状況で慣れないことの連続であっても、生徒にとって最良のことを提供しようとする先生方の熱い思いが伝わって来るように感じられました。

特別支援学校①　大阪府　公立特別支援学校（高等部）　森本　晃介

クラス・学年で具体的に起きたこと、起きていること

長期の休校による生活の変化により、心理的・身体的疲労が６月の学校再開後しばらくの間見られました。自閉症スペクトラム(ASD)を抱える生徒が著者のクラスに数名所属しています。これらの生徒は日程に沿って、自らのリズムを基本に行動することが得意です。一方で、急な予定の変化に弱い。度重なる学校再開の延長によりリズムが狂い、家庭内でパニックになる、普段通うデイサービスに通うことができなくなるといったことが生じました。またクラスだけでなく学年の多くの生徒が、学校がないことにより運動量が相対的に減少しました。そのことで、体重の増加や体力の低下が見られました。

次に学校再開後に顕著になっている問題です。「新しい生活様式」に従い、全生徒のマスク直用をめざしました。スモールステップでマスクを着用する練習を行いました。しかし、特性により口元の接触を嫌いマスクが出来ない生徒がクラスにいます。ソーシャルディスタンスについても、学年の多くの生徒が、生徒間の距離が狭くなり密になることもあります。障害が重度な生徒に対しての指導で、生徒・教員共にソーシャルディスタンスが取れないことも生じています。学校行事が軒並み中止になり、残念に思う生徒がいる一方で、行事が苦手な生徒の情緒的な安定に繋がるという事も生じています。保護者からの意見でも、行事の縮小に賛否がわかれています。

最後に著者がピア・サポートの実践研究の対象とした学年の軽度の障害を抱える生徒についてです。彼らはことばでのコミュニケーションも取れ、自立して生活ができる。学校生活では学校の中心として行動できる存在です。休校期間中もそれぞれの自宅で落ち着いて過ごすことができていたようです。しかし学校再開後は、制限のある学校生活が強いられ、行動面での主体性が大きく低下することが生じました。特に他者とのコミュニケーション面で消極的な姿勢が目立ちました。そのことで活気が失われ、授業等では重い雰囲気になることもありました。

クラスや学年で取り組んだこと、工夫したこと

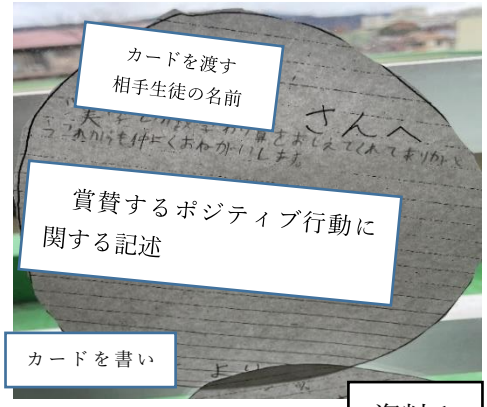
学校再開後しばらくは、クラスでは生徒の健康観察を中心に細かな変化がないかを徹底的に確認しました。特に発語のない生徒や意思表示が苦手な生徒については、表情や顔色の変化などに注視しました。不調が見られる生徒がいれば、養護教諭等と連携し個別に教育相談を行い、保護者との連携も進めました。また、日程の変更や行事等の延期・中止が常に想定されるので日ごろから、クラスの生徒にはその旨を継続的に伝えています。その中で、例年以上にスモールステップで生徒のペースをつくることを意識し、支援を行いました。例えば、重度の生徒たちの授業中などに、あまりにも疲労等が見られた場合は、個に応じてクールダウンをするなどしました。また学習時間や運動量を少しずつ伸ばすことを継続しています。

著者によって軽度の生徒たちを対象に、対人関係力や主体性の向上をめざし、ピア・サポートの実践を行いました。コロナの感染拡大の下で制限のある生活ではありますが、仲間同士のつながりを大切にして支えあえる関係づくりを目指し実践を行いました。１学期は非言語・言語にわけてのコミュニケーションを行い、ペアやグループ、グループ全体での話し合いを行いました。２学期は、サイコロトークを多く取り入れ、ロールプレイを交えながら、「話す・聴く」についてのトレーニングを行いました。そして、

ポジティブカードの活動を行いました。3 学期はピア・メディエーションの実践をしました。

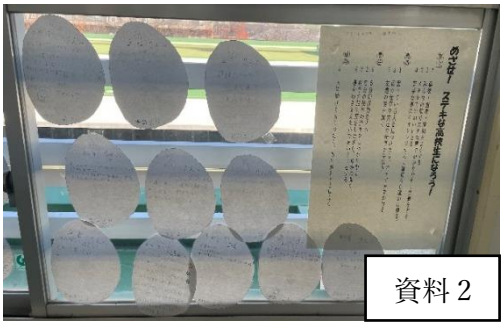
取り組みの成果

例年以上に生徒への丁寧な支援により、生徒一人ひとりの理解が深まりました。生徒の意見や些細な発言に共感的に聴く姿勢が生まれ、生徒との信頼関係も深まりました。そして生徒はコロナ感染拡大について彼らなりに理解し、受け入れることができるようになりました。クラスだけでなく、学年全体でもマスク・丁寧な手洗いができるようになった生徒が増えました。２学期の中期ごろから（10 月ごろ）気候の落ち着きもあり、生徒の学校生活に落ち着きがみられるようになってきました



資料 1

軽度の生徒たちを対象に行ったピア・サポートの実践の成果についてです。1 学期は授業数が少なかったが、生徒たちは意欲的に仲間とコミュニケーションを取ろうとしていました。2 学期になり実践に慣れてくると、「他の生徒と話しやすくなった」、「他の生徒のことを知ることができて嬉しかった」等のポジティブな意見や変化が、対象生徒全員で見られました。また、資料１にあるポジティブカードの活動に大きな効果がありました。カードを書く生徒ももらう生徒にとっても効果的な実践でした。書く生徒は、友達の良いところを探し、それを認めることで、他者と前向きにかかわろうとする姿勢を養うことができました。カードをもらう生徒は、友達から認められることで良い行動(友達から認められた行動)の強化につながりました。資料２に示しているように、カードを廊下の窓に貼ることで生徒の実践を「見える化」することにしました。このことで生徒たちはいつでも自分たちの実践を振り返ることができました。加えて多くの教員から肯定的な評価を受けることが増え、自信を深めることができていました。3 学期のピア・メディエーションの実践では、1 人でトラブルを解消するのではなく、複数の仲間と連携しトラブルを解消することを実践しました。ピア・メディエーションの実践は、1 人で仲裁をすることが多いです。しかし、ピア・サポートの実践で仲間同士のつながりを学んだ生徒が「チームでのメディエーションの有用性」について、著者に示してくれる形となり、生徒の成長を大きく感じられました。


資料 2

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

誰もが不安を抱える状態で、学校はお互いがつながり、支えあうことができる場です。ピア・サポートの観点を持ち、お互いが支え合い、苦難を乗り越えていけるような実践をしたいと思います。重度の障害を抱える生徒たちのピア・サポートの実践について考察し実践研究を進めていく計画です。重度の生徒であっても誰かの支えになることはできます。些細なことであっても喜びを感じ、それを支援者である教員や保護者等、仲間につたえることで大きな支えになることができます。軽度の生徒だけでなく、重度の生徒も含め学年全体でピア・サポートの実践をしていきたいと思います。

軽度の生徒たちからは、今後の学習として金銭や SNS にかかわるトラブルの解消法について学びたい

と意見があがりました。来年度は高等部の３年生になるので、社会で生きる上で必要な技能をより身に着けたいとのことです。ピア・サポートの実践を継続しながら、金銭や SNS について、生徒が主体的に考えることができるように学習課題を設定し、生徒と共に学びを続けていく所存です。

特別支援学校②　東京都　国立大学附属特別支援学校　岩井　祐一

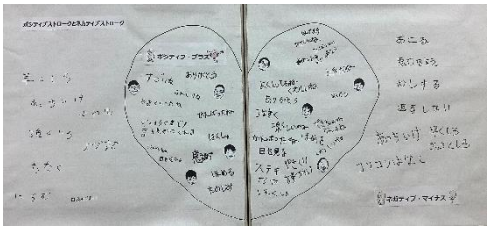
具体的に起きていること

・学校行事や進路に関する活動（現場実習・進路行事）がなくなり、学校生活への見通しが持ちづらくなってしまったり、不安に感じていたりする様子がある。
・ソーシャルディスタンスを意識したため生徒間や対教員の関わりが量・質共に希薄になってしまった。
・ステイホームの時間が増えたり外出する機会が減ってしまったりしたため、人と関わる機会や社会との繋がり、実際場面の取組や学習が少なくなっている。
・活動が制限される中で、どのような学習活動をおこなっていくのか。

学校、学級などで取り組まれたこと、工夫されたこと

【対　　象】知的障害特別支援学校高等部　２年生　８名（中度６名、軽度２名）
【取組内容（一例）】
・心のハート
６月の学校再開後に子ども達の気持ちを把握するために実施。生徒がコロナ禍の学校生活においてどのようなことを考えているのか、クラスの仲間が思っていることなどの理解を促進する目的でおこなった。
・ありがとうの花束
日常を振り返る、クラスの繋がりの中での自分を実感するために実施した。クラスの仲間の良いところや「ありがとう」を集めて、支えてくれている人を思い浮かべて感謝の気持ちを表現するワークをおこなった。

・ポジティブストローク
思いやりの心を持ったり、支え合いの心をクラスに広げることを目的に「ポジティブストローク」について学習した。ポジティブストロークとネガティブストロークについて、どんなことかを話し合い、ブレーンストーミングをおこない１枚のポスターを作成しクラスに掲出した。



その取り組みの成果、課題

・他者との学び合いを大切にしたり、支え合ったりすることのできる環境を創出することができた。
・ワークを通して、言語からでは表現できなかった進路・友人関係・余暇などの不安感を把握することができ支援に活かすことができた。右図は生徒が書いた「心のハート」である。半分が期待感、半分が不安や悩みを表現していた。

今後の取り組み課題、大切にしたいこと

・様々な人との関わりを量・質共に確保し大切にしていきたい。
・新しい生活様式の中でいかに成長支援や学習活動をおこなっていけるか。

支援センター等　　東京都　学校教育支援センター　杉尾　綾乃

具体的に起きていること

・昨年、特に夏休み明けから子ども達の不安感や喪失感の増大が感じられる。
・の遅れや格差があり、さらに心身症状があらわれている子ども達が多い。
・塾、児童館、子ども食堂の閉鎖などで居場所を失っている。
・部活動の休止による喪失感や、体調の悪さで遅刻や欠席が多い。
・教室に入れない子どもたちの校内での対応に限界がある。

学校全体で取り組んだこと、工夫したこと

・現場の先生方との共有と配慮ある個別対応を実施した。
・具体的には、管理職、担任、養護教諭、スクールカウンセラー、特別支援コーディネーターの先生方との情報共有、連携を図り、「チーム学校」として取り組んだ。

取り組みの成果と課題

・先生、保護者、子ども達の相互理解と思いやりの言動が深まった。
・課題として、個別対応は少しずつでも取り組めるが、学級内での仲間づくりや小集団への介入に難しさがある。

今後の取り組みの課題　大切にしたいと思っていること

・子ども達だけでなく保護者や現場の先生方の緊張感をほぐすための取り組み方や普及に工夫が必要である。教育委員会レベル、学校レベルで 3 密にならず、実践できやすい内容を検討し、このコロナ禍を乗り越えなければならない。

教育委員会　北海道　町教育委員会　小林　勝則

具体的に起きていること

・学習課題の要求の多さから、ストレスが見られる。
・今までなかった行動（奇声）が見られた。個人批判が多くなった。

学校全体で取り組んだこと、工夫したこと

・個人へのアプローチから、学級でのピア・サポートの展開を工夫した。

取り組みの成果と課題

・学級課題の解消には至っていないが、児童それぞれの達成感は増した。

今後の取り組みの課題　大切にしたいと思っていること

・今まで以上に、児童生徒の「心の居場所」となる双方向のコミュニケーションによる環境整備の実践

【特別支援学校・特別支援センター・教育委員会の事例から】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

特別支援の領域では新型コロナウイルスによって生活リズムにも特に変化を強いられたでことでしょう。児童生徒の特性もあり、より心理的、身体的疲労が増しています。見通しが持ちにくく閉塞感が漂い、急激な変更に対応ができず苦しまれる場合、マスクの接触を嫌う場合や対人距離が適切に保てない場合など教員の方々は指導に苦慮されています。適切な感染予防の線引きの理解にばらつきあり、活動の制限にもかなりの配慮がうかがえました。休校によって対人接触の機会が少なくなり、適切な距離の取り方を学ぶ機会も減少しているようです。

このような状況をきっかけに児童生徒の不安を確認し、この機会を発展的に捉え、ＩＣＴを活用したり、ピア・サポートの観点なども参考にしたりして、状況を乗り超えようとする試みがなされています。

それらをサポートする教育委員会や支援センターなどでも児童生徒の不安感や喪失感の増大や遅刻、欠席、身体的な症状の出現、防衛反応としての個人批判的な行動など様々な状態が見受けられます。この背景には子どもたちの心の居場所であった塾、児童館、子ども食堂などの閉鎖で安全基地を奪われたことが挙げられます。

現時点では新型コロナウイルスから全く開放されるにはかなりの時間がかかるでしょう。かつて着衣が和服から洋服に変わったように、マスク着用が非日常であったものが日常化しつつある現状が継続されるのか、マスクが不要な日が訪れるか状況が読めません。ただ現状では３密を回避し、身体的な接触を控えつつ、一方で心のつながりがより感じられる取り組みが求められるでしょう。そのためも状況に合わせたプログラムの開発やその試みが期待されるところです。

大学① 埼玉県　聖学院大学　相川　章子

●コロナで対面の機会がないときの事例

学生の困りごとに向き合い、つながりをつくる

具体的に起きていること

オンライン授業では学費を払うまでもないと言って退学する学生、友達ができずに大学に馴染めない学生、授業でオンライン上だけなので被害的になる学生、コロナの感染が怖くて一歩も家から出られなくなっている学生などもいます。対面の機会がないので顔を合わないなかで支え合う文化をつくることに一工夫必要だと感じています。

大学全体で取り組んだこと、工夫したこと

・大学としては、「コロナ禍における学生生活アンケート調査」を実施し、学生たちの実態、状況、困りごと等を聞き、教授会等で共有しました。
・また大学に一度も来られない、友人ができない一年生を憂いて、上級生が「オンラインお茶会」の開催（障害学生支援室オリーブデスク付のキャンパスライフサポーターCLS 主催）、オンラインに繋がっていない学生を憂いて全１年生に手書きコメント入り葉書の発送、学生相談サイトの開設（学生エンパワメント推進室付エンパワメントくらぶ EMPA 主催）などの提案が出され実施しました。

取り組みの成果と課題

・「コロナ禍における学生生活アンケート調査」を実施できたこと、学生たちの生の声を聞けたことは大きな成果でした。この結果をもとに課題を整理し、必要な部署に働きかける予定です。
・「オンラインお茶会」は参加学生の満足度は高く、またファシリテーターを行う CLS 先輩たちの成長や変化も見られている。EMPA の取り組みについては今後の実施体制について検討が必要となっています。
・学生たちは一方で順応力も高いと感じています。大学に来ることができないまま一年が過ぎていることや、対面授業がないことはかなりの異常事態であるが、それにそれなりに適応し、楽しむ力をもつ学生もいることを感じています。

大学②　福岡県　福岡教育大学　西山　久子

具体的に起きていること

ストレートマスター学生と長期派遣研修員である現職学生が共に学ぶ，専門職学位課程（教職大学院）において，以下のような状況が見られる。

・授業での学び合いなど，ピアの関わりを通した学習機会を設定しにくい。
・大学生活での日常的な院生間の交流（ピアとしての関わり）が起きにくい状況がある。
・相互の交流機会が少ないため，本来得られる「ロールモデル」という斜めのピア関係ができにくい。
・結果として院生の所属先に対するコミットメントが形成されにくく，居場所感につながりにくい。

学校全体で取り組んだこと、工夫したこと

① 〔個別授業〕学校カウンセリングに関わる授業で，グループ単位のメンタルヘルスの調べ学習の機会を設け，小グループを作り，Web 会議システム（例：Google Meet のサブルームや Zoom のブレイクアウトルーム：手動）で数回にわたり協議の時間を確保した。
② 〔個別演習〕教育相談などの力量形成を目指す授業において，Web 会議システムを活用し，院生間のロールプレイなどを実施し，実践力の向上の機会を提供した。
③ 〔専攻全体〕院生状況調査として，各院生の学修の進捗状況を各担当教員がまとめ，専攻内でのオンライン会議で共有し，学校全体に提案し，授業等の場面に適した示し方で支援を提供した。
④ 〔大学全体〕文部科学省・福岡県教育委員会・大学学長・健康科学センターからの情報を，大学のポータル・ウェブサイトなど複数のルートから学生に発信し，重要事項に関する周知を心がけた。
⑤ 〔大学全体〕教育実習・学校実習で公立学校に赴く実習生として，事前の健康管理ガイドラインに基づく体調管理記録の作成により，実習先と相互に安心した状態で活動できるよう心がけた。

取り組みの成果と課題

〔成果〕・学生間の連携がオンライン会議ツールなどを活用して実施された。
・ICT を活用した多様なアクセス方法や教育活動の方法論に触れ，実践的な理解が促進された。
・コロナ禍で制限があるなか，学内外の関係者の参加を得た専攻全体の発表会が開催できた。

〔課題〕・不安定な Wifi 環境など，インターネット環境が十分でない学生の学修に困難が生じた。
・入学時からオンラインでの交流が中心であった院生間のピア関係を深めることが難しかった。
・援助希求の苦手な学生は，ニーズを伝えたり理解してもらったりという学習がしにくかった。
・リモートのため，援助力の高い学生が力を発揮しにくく，要支援学生が把握されにくかった。

大学③　高知県　高知工科大学　池　雅之

具体的に起きていること

・非日常が日常になり従来の生活様式が持続できず様々なストレスが発生していること
・対面授業ができず、オンライン授業への戸惑い、一方でオンライン授業を望む声もある。

大学全体で取り組んだこと、工夫したこと

① 学長や担当部署から情報提供、健康管理面での対応についてホームページやポータルサイトからの発信
② 様々な問い合わせに対してメール、電話などで対応。事案によっては感染予防をした上での個別面談の実施

取り組みの成果と課題

【成果】・対面での個別相談、電話相談件数の増加。
【課題】・オンライン授業などで居所に待機を促され、活動が抑制される中での様々な体調やメンタル面での滞りをどのように解除や開放していくか。
・不安ばかりを強調せず、正確な事実に基づく情報の提供。

大学④　埼玉県　聖学院大学院　兒玉宣昭

具体的に起きていること

・ASD の当事者にはかえって都合が良いらしい。
・zoom などのミーティングが増えたがどこか物足りない

大学全体で取り組んだこと、工夫したこと

・zoom だけでなく必ず会う機会を設ける

取り組みの成果と課題

・今まで通りの運営が出来ている

今後の取り組みの課題　大切にしたいと思っていること

・ピア・サポーターと仲間との会食を通した交流

【大学の事例から】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

コロナ感染拡大のもとで、新しい出会いと学びに期待を膨らませて大学に入学した学生たちを待っていたものは、入学式もなく休校によって立ち入りすら容易にはできない大学でした。春学期の途中からはオンライン授業が始まった大学、秋学期には対面授業を始めた大学が増加する一方で、年間を通してオンライン授業が軸となった大学もありました。コロナ感染拡大によって、対人関係とコミュニティが寸断され、これまでのような対面での出会いと学びができなかったことに加えて、大学生活を支える学生のアルバイトなどの大幅な減少も生み、休学や退学をせざるを得ない学生も生まれました。また、相互の交流機会が少ないため，本来得られる「ロールモデル」という斜めのピア関係ができにくい。結果として院生の所属先に対するコミットメントが形成されにくく，居場所感につながりにくいといった教職大学院からの状況報告もありました。

今回の大学からの事例報告では、これまでの非日常が日常生活になり、不安やストレスを抱える学生が増加する状況を受けて取り組まれてきたことの一端を垣間見ることができます。たとえば、大学として学生生活アンケートを行い、学生の困りごとの調査を実施して対応を検討する。様々な相談孫口の開設と情報提供を丁寧に学生に行うなど。また、大学の関連部局と連携した在学生による新入生への取り組みもありました。先輩が新入生に呼びかけた「オンラインお茶会」の開催。学生オンライン相談サイトの開設。オンラインに対応できない新入生を配慮して、手書きのコメント付き葉書の送付など。オンラインの授業の中で、小グループによる協議の場を設定するといった工夫もみられました。

オンライン授業の方が参加しやすいといった学生もいますが、オンライン授業が日常となり、活動が抑制される中での体調やメンタル面での様々な不調に対する支援は、どの大学でも課題となっています。これまでの生活では気づかなかったことへの気づきが生まれ、学生たちの「つながり欲求」は高まっており、ここから新しいピア・サポート活動も生まれています。こうした条件のなかだからできることを、学生の知恵を借りながら試行していくことが、ピア・サポート活動の新たな展開になっていきます。ソーシャルディスタンスではなく、むしろソーシャルコネクションを、オンライン授業の工夫や学生同士が対面で関わる機会を徐々に増やすことで深めていくことがこれからの課題であり、そこから希望も生まれてくるのではないでしょうか。

＊参考文献：春日井敏之・増田梨花・池雅之編著（2020）『大学でのピア・サポート入門―
始める・進める・深める―』ほんの森出版.